

---

# アイテム鑑定士の業務内容

冴野一期

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイテム鑑定士の業務内容

### 【Nコード】

N0340Z

### 【作者名】

冴野一期

### 【あらすじ】

魔都ルーン。その職人街で、小さな店を構える青年の物語。

## 項目1：掟と制約

この世界に満ちた概念を、大方知り尽くした男がいた。

「峠越えは気分がいいな」

晴れた昼下がり。これから西に落ちていく太陽が、雲の波間に浮かんでいる。

春先の蒼天だった。足下は、人が何百年もかけて踏みしめた畦道が続き、両脇には背丈の低い野草と、幾色かの花が咲きほこる。

「そろそろか」

空を見上げ、片手で陽をかざせば、一羽の鳥が目に残った。気持ち良さそうに眼下に広がる森へ降りていく。その森から離れたところ、川の流れに沿って街が栄えていた。

「さて……」

風が吹く。ざわざわ、野に生えた小さな花が種子を飛ばす。それもまた青空を昇って、導くように街へ向かう。

「故郷は、少しは変わったか？」

男は前を向き、ふたたび歩きだした。

街へ至る道は、申し訳ない程度に均されていた。男の隣を、荷馬車を通り超える。色褪せた幌ほろの隙間から、暗鬱とした瞳の少年少女が垣間見えた。

「……奴隷か」

足がわずかに止まる。

「最近、南の方で、農民による革命があったな……」

なれば、没落した貴族の子供かもしれない。

苦いものを味わった顔で足を進ませる。城壁の一角に辿りついたのは、先ほどの馬車が通り抜けた直後だった。門番が振りかえる。  
「ん、なんだ貴様は」

「普通の旅人だが」

鋼の鎧を着た門番は、男を疎ましそうに睨んだ。ジロリと眺めた後で、白銀の籠手に覆われた手を伸べてくる。返答の代わり、木製の割符を取りだし見せつける。

「関所もきちんと通ってきた。『魔都』に入れてくれないか？」

「そんな物はどうでもいい。銅貨二枚だ」

「は？」

「最近できたばかりの法律なんだよ。ごちゃごちゃ抜かすな。代わりに一撃くれてもいいってんなら、釣りはいらんぜ？」

拳が握り締められる。門番は、たつぷりと贅肉のついた顎を緩め、卑下した。

「……わかった」

一拍の後に応じた。小さな革袋より、銅貨二枚を素直に取りだし、て払う。

門番の視線が、差し出した男の指先で止まった。

「おい、ちよつと待ちな」

「まだ何かあるのか？」

「あるぜ、いくらでもな」

銅貨を奪い、ニヤニヤと、嘲りの色合いが増していく。

「今思い出したんだが、この魔都に入るには、持ち物を一つ置いてかねえといけねえのさ」

「……中々に斬新な法律だ」

「そうだろう。とりあえず、その指に嵌めた指輪を渡しな。見たところ黄金だろ、そいつはよ」

明らかな脅し文句。対し、男の口元にも笑みが浮かぶ。

「目敏い豚だな」

「あ？」

「確かに、こいつは貴様の命より価値がある」

「おい。指ごと落とされてえのか？」

「そうか」

瞬間「ヒュッ！」と、風が切り裂かれる音がした。

門を抜け、男はふらふら、街を歩いていた。

空が雨雲に覆われはじめ、ひたひた、近づく雨の気配を感じとる。  
「厭な気分だ」

太陽が、尾根の向こうに消えていく。辺りは急速に色濃く、夜の足音が近づいていた。その中にあっても、喧騒あふれる声は騒々しい。確かに活気はあるが、派手な彩りの影にある貧富の差は隠せない。虫食い穴のように目立ち、匂ってくる。

「なにも変わっていないのか」

道を少し逸れてみた。ゴミに満ちた路地を歩けば、

「……………して、やる……………」

黒ずくめの少年が、壁に背を預けて死にかけていた。

腹部からドス黒くなった血を吐きだし、どんより曇った空を、一心に睨みつけている。

男はたいして気に留めず、横切ろうとする。

少年もまた、同じ言葉を続ける。

「……………殺して、やる……………」

呪詛の声。

ひたすら、ひたすらに、呪う。

男の足が止まった。愉快そうに口端を歪め、正面から見下ろし言い切った。

「おまえは、もうすぐ死ぬ」

ぴくり、と少年の眉が動く。瞳が苦痛に震えながらも、わずかに焦点が定まり、ギラついた表情で男を見上げた。

「……………死んで、たま、るか……………」

「無理だ。数えて百も経たないうちに、おまえは死ぬ」

「……………ッ」

血を吐いた。

それでもまだ飽き足らないように、黒ずくめの少年は言霊<sup>ことだま</sup>を紡い

だ。

最期の一音まで、憎悪の言葉を、殺意をたつぷり吐きこぼした。  
なにひとつ、救いを求めなかった。

呪って呪って、死んでいった。虚ろになった瞳は変わらず、じつと男を見上げたまま。

「そうだな。この世界に救いは無いな」

空に浮かぶ暗雲の気配が、急速に広がった。

世界を色濃く覆い、雷鳴が轟く。地上に落ちた雨を受け、男が笑う。

「少し、変えてみるか」

口端を吊り上げる。膝を折り、指輪を嵌めていた側の手を伸ばす。  
乾きつつある返り血が激しい雨で流されていく。

「俺の【力】を分けてやる。少年、足掻いてみせろよ」

言葉に呼応するように、黄金の指輪が輝いた。

闇の中。指先にだけ、淡い光が満ちていく。

## 項目2：買い取りは安く、誠実に。

『 アイテム鑑定士の業務内容 』

かつて、魔都と呼ばれた強国があった。高度な文明を誇っていたが、なんらかの理由によって地の底へ沈んでしまった街だ。

それから長い時を経て、地上にも街ができあがる。

古代の知識を求める者たちと、その知識を売り払い、富を求める者たち。

その場所はいつしか、もう一つの魔都『ルーイン』と呼ばれるようになっていた。

ルーインの目抜き通りの一角。

その路上では、自前の店を持たない流れの『冒険者』たちが商いを行っていた。中には市場の商人と変わらない声を張り上げる者も多い。

「 さあ、見てつてくれよっ！ ここに並ぶのは、今しがた命がけで『迷宮』から発掘したばかりの >アーティファクト< ですよええ！」

とりわけ声のでかい露天商がいた。

その声に惹かれるように足を留め、並ぶ商品を覗いていく客がいた。身形のいいのは大抵自前の店を構える商人や、王宮の『ギルド』に属する職人たちだ。しかし最も多いのは、迷宮に潜って遺物を漁る冒険者だった。

彼らは、決して街には馴染まない、特有の雰囲気を漂わせていた。

「 もうちつと、まともなモンはねえのか？ 」

「 いやあ、なにせ過去の遺物ですからねえ。見た目はちつとわりい

グートアハテン

すが、王城のギルドで働く鑑定師に見せりゃあ、値も吊りあがるつてもんでさ」

「なら、自分で持ってけや」

「いやあ、奴らの鑑定料は、バカ高いすから。その身銭が無えんすわ」

「下手な言い訳しやがって。テメエも冒険者だろうが。これが、ガラクタに過ぎねえことを知ってて売りつけようとしてんだろ」

誰もが同じような反応をした後で、それから「ん？」と、鞘に入った無骨なナイフに興味を示した。動物の皮で作られたらしい鞘を外すと、刃こぼれ一つない、漆黒の刀身が姿を見せる。

「おお、ダンナ、お目が高いっ！」

すかさず、露天商の男が押しまくる。

「それ！ 中々いい品でしょう。銀貨一枚でどうっすかねっ！」

「いや、いい」

しかし客たちは、皆が得体のしれないなにかを感じ、即座に刃を戻して立ち去った。

「……チッ」

客の後ろ姿を見送り、露天商が舌を打つ。

「やっぱ売れねえか。こんな演技の悪い代物はなあ……」

どのように角度を傾けても、一切の光を映さない漆黒の刃。

一滴の血もついておらず、刃こぼれも無い。それが逆に、いつそう不気味だった。

「やーれやれ……。アレから漁ってきたのは、やっぱマズかったかねえ……」

「おい」

小声で愚痴をこぼした時だった。入れ替わるように、買い物袋を抱えた青年が足を止めていた。

「それ、見せてくれるか」

「へ、へいつ、どれでもどうぞっ！」

「いや、お前が持つてるナイフだけでいい」

「こ、これですかい」

「ああ」



青年は、少しこけた頬と顎骨の線が良い、それなりに見栄えのする顔だった。髪と瞳は明るい茶色。身に着けているのは、簡素なシヤツの上に綿をつめた濃紺のベストだ。下も量産された革ズボンだが、足下は金属で補強したブーツを履いていた。

「……………」

そして、目つきだけはやたらと鋭い。

黙ったままベストのポケットから片眼鏡モナクルを取りだし、右目に被せる。

「貸してくれ。手に持って見てもいいんだろ？」

手を出して受け取り、ナイフを抜く。何気ない一連の動作が、流れるように素早い。

「兄さん、あんたも冒険者かい？」

「昔はな」

答え、他の客が難色を示したナイフを見る。

黒の刀身、続けて外された革の鞘もまた、隅々まで目を通していく。

「これ、どこで拾ったんだ」

「へ！？」

「ずいぶん染みついてる、と思ってな」

ぎよつとした様子で、露天商が目を見開いた。

「な、なにが……。ついてるんで？」

「なんだと思う？」

反して青年の口元には、ニヤリとした笑みが浮かぶ。

「別に追求するつもりはねえよ。ただ、こいつは一級品だな。金属の打ち方を見ても分かるし、なにより『鞘』の方も文句なしだ。単なる薄汚れた毛皮に見えるが、わざわざこのナイフの為に作られた一品物だろうな」

「そ、そうなんで？」

「なんだ。何もわからないのか？」

青年が言えば、露店商が慌てて弁明する。

「……え、いや、まあ、この下に眠る、古代都市に住んでた職人だろうつてのは……」

「ちげえよ。こいつは東にある異国の文字だ。刀剣を練成した技術にも、最近の手法が使われてる。間違っても古物じゃねえ」

「や、やたら詳しいな。兄さん、鍛冶職人か？」

「違う」

言って、今度はナイフを陽にかざす。さらに様々な角度から検分した。

「　　気に入った」

静かな声とは裏腹に、鋭い瞳で、売り手である男を見据えた。

「いくらだ」

「へ？」

「引き取ってやるよ。いくらだ」

「あ、ああ……。んじゃ、銀貨一枚で」

「ほらよ」

青年は腰元のポシエットから銀貨を一枚投げた。露天商は、両手の中に納まったそれを見て、しばらく「ぽかん」としていたが、突然夢から覚めたように言い募る。

「ま、毎度っ！　なんだよ兄さん。もしかして、鑑定師か？」  
グイートアハテン

「いや、王城お抱えの職人共とは無関係だ」

青年はナイフを腰のベルトに下げ、買い物袋を持ちなおした。

「俺は自由鑑定士だよ。職人街に店がある。鑑定したいモンがあれば持つてきな。迷宮のアイテム一点につき、銀貨一枚で引き受けるぜ」

「な、なるほどなあ！　いやいや兄さんも人が悪いねえ。なんなら、その短刀を鑑定」

「コイツをどこで拾ったか、もう少し、根掘り葉掘り聞いてもいいんだぜ？」

「……あ、いや……。そ、そうだ、兄さんよ！　自由鑑定士ってことは、師匠がいたりすんだろう？　ギルドお抱えの鑑定師はたっけ

えからよ！ よかったら紹介してくんねえか」

「今はいねえよ。店も、俺の名義だ」

「へえ！」

露天商は、感嘆と羨ましさの入り混じる声をあげていた。

「その歳で自分の店持つてんのかあ。兄さん、名前は？」

青年はほんの少し、口元を歪めた。

「ジークハルト・ワーグナー」

もしかすると、営業スマイルを意識したのかもしれない。しかし

どちらにせよ、子供が慕うような笑顔では無かった。

### 項目3：古物の鑑定と、旧来からの客応対について

月明かりに照らされた職人街の通りは、しんと静まりかえっていた。そのなかで、一軒だけ灯りのついた建物がある。見栄えよりも実用的な印象を放つ、無骨な赤レンガで出来た小さな店だ。正面に木製のプレートが下がり、閉店中だと告げていた。

勝手口を抜けた先、さして広くない室内の中央に、長机が置かれている。

天井から吊り下げられた電球の明かりが、ぼんやり届く。

「……………ゴミ」

ジークハルトは椅子に座り、手を動かしていた。赤い宝石が乗った杖を置く。

茶色の短髪と同色の瞳。やたらと険しいその目を細めれば、どこか猫科の肉食獣を思わせる雰囲気<sup>ムネ</sup>が滲みでる。

「……………こいつもゴミ」

白い絹の手袋をはめ、無言で、青い宝石を乗せた指輪を、ためつすがめつする。

その指先が不意に止まり、舌打ちをした。

「クソ。初見の客は信用ならねえな」

ジークハルトの右目には、昼間つけていたものと同じ、丸い片眼鏡<sup>モノク</sup>が被せられていた。銀縁の外枠が、苛立った内面に呼応するように光る。

「あの野郎。なにが伝説の >妖精指輪< だ。ホラ吹きもいいとこだぜ。指輪から【魔】の反応がぜんぜんしねえ。単なるクズ銀じゃねえか」

両手を動かしながら、今度は青い宝石に注目した。

「こっちの【魔石】は本物みたいだが……」

慎重に、ゆつくりと、角度をズラしていく。指輪の青い宝石に注目すると、じんわり、右目に乗せた片眼鏡のガラスに、イメージが

浮きあがってきた。

ぽつ、ぽつ、飛び散る、赤い鮮血の色。

すうーと、人の手を模したイメージが伸びてくる。

「ウゼエ」

実在する己の手で払いのけると、イメージは霧散した。

ひとつ溜息をこぼし、片眼鏡を外す。指輪は再び、なんの変哲もない銀の指輪に見えていた。

「どこの死体を漁ってきたんだか。良物は、あのナイフだけか」

指輪を机上に戻し、傍らに置いてあったマグを取る。中には半分冷めたコーヒーが残っていた。苦い顔を浮かべ、茶色い毛を掻きむしる。

「面倒くせえ」

改めて、作業机の上を見渡した。

転がるのは革の鞘に入った短剣を除くと、赤い宝石を載せた杖、目を引く青い宝石の指輪が三つに、黒い水晶で作られたネックレス。そして極めつけは「カタカタ」音の鳴る鎖帷子だ。

「ったく。王城の鑑定師<sup>グイットアハテン</sup>が拒否するような、面倒なアイテムばかりじゃねえか。まとめて銀貨六枚で引き取らせてやる」  
手にしたコーヒーを、ぐびつ、と飲み干したとき。

カラン、コロン、カララン。

澄んだ鈴の音が、薄明るい店内に響いた。一人、男の客が入ってくる。

「ジャマするぞ」

背の高い、青空の髪と瞳を持つ、二枚目の男だ。黒衣のロングコートを着て、足は膝下まである濃紺のブーツを履いている。腰元には一振りの長剣をたずさえていた。

「相変わらず仕事熱心だな、ジーク」

「……エリオット」

「なんだ？ 嫌そうな顔をされる覚えはないぞ」

「表の看板が見えなかったのか。店はとつくに閉まってんだよ」

「そうか。暗くて分からなかった」

さらに、と見栄えのいい顔が笑う。

エリオットと呼ばれた客は、木目の床を進み、客用の椅子へと腰かけた。

「仕事熱心なおまえに、いい話を持ってきたぞ」

「頼んでねえ。それに今は、面倒事を聞いてる暇はねえよ」

「鑑定中か。相変わらず、面倒な【属性】が付与されたアイテムが並んでるな」

エリオットが、先ほどまでジークハルトが鑑定した指輪を取りあげる。

宝石から赤い【霧】が立ち込めた。再び人間の腕が伸び、エリオットの手に食らいつかんと迫るも、

『【呪】を知る我、命ず。 > > 解除・<sup>デイス</sup>属性付与<sup>エンチャント</sup> < < 』

ささやくと、赤い【霧】は弾かれたように消えてしまう。続けて、その他のアイテムにも手を添えて、同じ言葉を告げていく。

「ふん。【魔】が外れたら、ただの粗悪な指輪だな」

「おい、俺が預かってる商品に、勝手な真似してんじゃねえよ」

「べつにいいだろ。持ち手に害意を与える【属性】が付与された『呪い物』を、好んで引き取るやつもいまい」

「……なら、ちょうどいい。ここらのアイテム、全部【解除】しやがれ」

「おい、こっちは客だぞ」

「うるせえ。やれ」

この世界に満ちた【魔】と呼ばれる力。

万物、ありとあらゆる【属性】のイメージに、別のイメージを付与し、本質を操作、または変貌する力。

【魔】が秘められた有用なアイテムは、人々から >アーティファクト< と呼ばれ、そうでないものは「呪い物」などと呼ばれていた。

エリオットは「人使いの荒い」などと愚痴をこぼしながらも、素直に呪いを解いていく。

黒い水晶のネックレスと、さらに『カタカタ鎖帷子』も黙らせたところで、

「さて、後はそのナイフか……」

残るのは、革の鞘に入っていた短刀だ。

手を伸ばすと、先にジークハルトが取りあげた。

「こいつは必要ない。今朝、俺が市場で買いつてきたもんだ」

抜き放てば、黒い刀身が現れる。

ジークハルトの片眼鏡越し、刀身の中央に【歪んだ渦】が見え隠れる。エリオットの口元からも「ふむ」と声があがる。

「いっぱしの冒険者なら、そいつに秘められた【魔】に警戒しそうだが」

「単なる『呪い物』と、純度のいい【魔石】の違いが見抜けなけりや、鑑定士なんざやってねえよ。おそらく、これを作った職人はよっぽどの腕利きだぜ」

「何故わかる？」

「本体に、一切の刃こぼれも血の跡もついてねえ。 鞘は使い古

された感があるのに、刀身が真新しいってのは妙だろ」

「そうか？ 普通に研いだんじゃないか？」

ジークハルトが首を振る。

「この『いかにも怪しいです』って刃を研いだとすれば、普通に実用性があるってことだ。それに、もう一つの可能性があるだろ。このナイフがそもそも『直接斬りつける用途に使われてなかった』ってな」

「なるほど」

エリオットが、会得の言ったという感じに頷いた。

「特定の【魔】を発動させるべく作られた、触媒用の『クリスナイフ』か」

「そついうこつた。片眼鏡で鞘の方も見たら、そつちにも【魔】の反応があつたんでな。特別な【魔石】は、作り手の意識で、姿も、形も、色も変える。だが【本質】を見抜く片眼鏡と、質量だけは誤魔化せねえ」

片眼鏡モノクルを載せたジークハルトの瞳が、ナイフの鞘を見据える。一見して動物の革に見えるそれは、刀身と同じ、漆黒の色合いを映し出していた。

「作り手の遊び心だ。鞘、刀身、握り手に至るまで、すべてが【魔石】で出来たナイフだ。革の鞘を手にしたときの重さによる違和感と、抜き身にした時の真つ黒な刀身のせいで、呪われてるように勘違いすんだろうぜ」

「見事な鑑定だ。いくらだった？」

「銀貨一枚」

ジークハルトがさかさず答えると、エリオットが噴き出した。

「いい買い物をしたなあ。金塊に等しいお宝を、銀貨一枚で買い取ったか」

「宝が腐つてんのを回収して何が悪い？」

エリオットが、くつくつと、心底楽しそつに笑つ。端正な表情を緩め、口端を吊りあげる。

「たいした奴だ。やはり、場末の自由鑑定士エルサースにしておくには惜しい」

「そいつはどうも」

「よし、そろそろ仕事の本題に入るか」

「うるせえ、引き受けねえって言つてんだろが」

ジークハルトの睨みを笑つて受け流す。

「人に解呪を任せておいて、それはないだろう。いいから話だけでも聞いてくれ」

微妙に下手になりはじめた。

「今回の仕事は王城から来たものだ。もう一度言つが、損は無いぞ」



「……城からの依頼？ 危険はねえのか」

「当然ある」

「帰れ。死ね」

ジークハルトが心底嫌そうな顔をする。ナイフを引っ込め、睨みつけた。

「場末の鑑定士の店に、厄介な依頼持ってくんじゃねえ。テメエんとこの『ギルド』で片しとけ」

「ウチは隠密行動に向いてる人材が少なくなてな。できれば、あまり顔が知れてない奴で、なおかつ腕利きが好ましいわけだ。なっ、頼む、ジークハルト」

「うるせえ。つーか、なんで王城から仕事預かってくんだよ。テメエは元々、ただの冒険者だろうがよ」

「ふっ。それだけ、この俺の名が売れてきたということだなっ」

「アホが。言いように使われてるだけだぜ……」

ジークハルトは、そっと腹部を抑える。

じわっと、わずかに古傷が痛んだような顔をした。

「悪いが、帰ってくれ。俺は、貴族の犬になるのはごめんだ」

本気で苛立つ言葉を耳にすれど、エリオットは引き下がらなかった。

「便利屋のように使われることに辟易してるなら謝る。だが事実、お前の力が一番高いと確信している。それに俺は、信頼を切り捨てるようなバカとは違うぞ」

懷から小さな袋を取りだし、放り投げる。

中に詰まっていた金貨が、机の上に広がった。

「前金で二十万だ。質素に暮らしていれば、三月は食<sup>みつき</sup>っていけるだろ？」

「だから……」

眉間に指を添え、ジークハルトは、深々とため息をこぼす。

「俺は、只の鑑定士だって、言ってるだろうが」

「謙遜するな。鑑定だけじゃないだろう。鍵開け、罫外し、古代知

識に、異国の言語。ついでに薬物調合とかな。おまえなら、今でも一流の冒険者としてやっていけるさ」

「引退済みだってんだよ」

市場価値の高い金貨を取りあげ、指で弾く。

手に落とし、純度を確かめるように軽く噛んだ。

「……ま、金に貴賤はねえ、か」

「その通り」

「言ってみる。一万上乗せで、話ぐらいは聞いてやる」

「そうこないとな」

エリオットが平然と、新しい袋を取りだし乗せた。そして、真顔になる。

「事のはじまりは先週だ。南西にある森で起きた噂は聞いてるか？」

「知らねえよ。ここから南西の森つーと……」

「【魔】に優れた、『エルフ』の一族が住んでる森だ」

言葉をひとつ区切る。

「先週から、エルフ族との連絡が途絶えているそうだ。おかげで、

連中の森から取れるアイテムの流通が無くなり、王城は大騒ぎらしいぞ」

「そのアイテムってのは？」

「>森の霊薬< だ。消費した【魔】を回復させる、飲み薬だな」

「ああ……。王城が販売を独占してるアイテムか」

「そうだ。そのアイテムの流通も途切れている。エルフ族はおそらく、ほとんどが死に絶えたという見方になっているらしい」

へえ。

ジークハルトは、どこか気のない様子で返事をした。

「それでだ。この街で、明日の夜に盗品が流される情報を掴んだのが、つい昨日だ」

「盗品？」

「エルフ族の >アーティファクト< が売りに出されるらしい。売り場に潜り込めば、一族が滅びた元凶が掴めるかもしれん」

「流してる連中の正体は分かってんのか？」

「確証はないが、十中八九、この国の貴族だ」

「あー、腐ってんな」

唾を吐き捨てるように告げ、後ろ髪をかいいた。

「自分らの不始末が処理できず、テメエのギルドに依頼が来たわけだ」

「そういうことだ。腐った貴族の連中に、一泡吹かせてやるのも面白そうだと思わんか？」

「……悪くねえな」

ジークハルトが応じれば、蒼の双眸が深く頷いた。さらに、懷から一つの仮面を取りだして置く。顔の上半分を覆う、目と口元のところだけ開かれた、白いオペラマスクだ。

「なんだそりゃ？」

「これが、売り場に行くための招待状らしい。手にとって見てくれ」  
ジークハルトは片眼鏡モノクルを装着し、受け取った仮面を観察した。額に触れるところを撫で、表情を歪める。

「気づいたか？」

「……詳細は分からねえが、わずかに【魔】を感じる。催眠系か？」  
「恐らく。内側に己を驕らせる【属性】が籠められているはずだ。あとは……」

エリオットが、椅子に深く身体を預ける。少し言葉を濁して告げた。

「オークションの客は、男に限定するらしい」

「それがどうかしたのか？」

「確証はないが、エルフの生き残りが、売りに出されるらしい」  
「クソだな」

「同感だ。さて、そろそろ返事を決めてもらえるか？」

ジークハルトが片眼鏡を外す。茶の短髪と同じ瞳を閉じ、思案に耽る。

壁際に置かれた棚上。時計の秒針が一週した。

ゆつくりと瞳を開く。

「いいぜ、引き受けてやるよ」

**項目4：悪意と殺意の目利き。（前書き）**

一部、倫理感に外れる描写があります。

#### 項目4：悪意と殺意の目利き。

催しは、月の浮かばぬ深夜に開かれた。

大通りから離れた裏路地の、朽ちかけた屋敷。正面の門は錆びついて、建物自体も随分と塗装が剥がれ落ちている。

もうずっと、人の手が入り込んでいないように思える有様だったが、

「会場は二階か」

注意しなければ見落としてしまう程度の明かりが、一箇所からこぼれている。

「慣れないもんを着ると暑苦しいな」

ジークハルトは、黒一色のコートと、白のオペラマスクをつけ、錆びついた門を単独で通り抜けた。続く中庭は雑草が伸び、石畳みは割れている。しかし人が通るであろう枯れた噴水の周辺は、確かに人が通ったと思わしき足跡が残されていた。

室内に入っても同様だ。消えるか、消えまいかといった風前の灯火が、二階へ続く。

「……………」

辿り着いた部屋。十を越える、仮面の視線が向けられる。

室内はテールクロスを被せた机だけがあるホールだった。ただし内装は、急ぎ整えられた様相で、埃をかぶったシャンデリアの代わり、【魔】を付与された燭台がそれぞれのテーブルに灯っている。床の赤絨毯はところどころ糸が解れたまま。両側の窓は、分厚い黒の布きれで覆われているものの、ジークハルトが外から見たとおり、僅かに部屋の輝きを漏らしている。

杜撰<sup>ずさん</sup>だな。

思いながら、まっすぐ、部屋の中央に進んでいく。

蒐集家たちは、本来の目的とする物へ視線を向けた。

それぞれの机には、強奪されたと思わしきアイテムが並ぶ。指輪やネックレスの装飾品、礼拝に使われていたらしい聖杯などの呪具、さらには木製の弓や杖までも。強奪された時についたのか、血の跡がこびりついた物も少なくなかった。

「……よい、実によい。迷宮で取れるアイテムとは、また少し性質が異なるようだ」

一人の仮面の男が呟いた。

ジークハルトもまた横から覗き込んだが、一瞥をくれただけで、別の机に向かう。

贋作かよ、と小声で呟き、続けて向かった席では、三人の『仮面』が、密やかに笑いあっていた。

「いやはや、驚きました。今回はこちらに来て正解でしたよ」

「はは、本当に」

内二人の声は、いくらか皺がれた男の声。

残る一人は、この場で唯一に黒のドレスを着ている。

「ご満足いただけて、なによりです……」

真つ赤なルージュが弧を作り、妖艶な雰囲気醸し出す。

「本日取り揃えた商品は、どれも一級品ばかりですが、さらにこの後、とっておきの商品が控えておりますので……」

「ほお、それは楽しみだ」

「まったく、なにが出てくるのやら」

物欲をたつぷり孕んだ声。そこへ気にせず割って入り、宝石で彩られた髪飾りを、ひよいと摘みあげる。

「……………」

ジークハルトは、手の内で髪飾りを転がした。三つの仮面がその様子に釣られていると、

「これは悪くねえな」

同じ調子で机に戻し、それからまた、足早で去っていく。

「……なんでしょう、今のは。乱暴な」

「随分若そうな声でしたなあ。どこぞの成り上がりの息子でしょう」  
「違う」

仮面の男らは嘲笑し、再び談笑に戻る。  
ただ一人、ドレスの女だけが、その行動を追っていた。

すべての机を見て回ったところで、ジークハルトは一つ息をこぼした。

口元に手を添えて、さてどうするか、といった感じに立ち尽くしていた時だった。

「皆さま」

ドレスの女が、部屋の中央で声をあげた。一同の仮面が、すべてそちらを見る。

「本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。これより最後の一点をお披露目したく思います。あちらを、ご覧くださいませ」

ホールと廊下をつなぐ扉が軋んだ。

ジャラントと、硬質な部屋の中に響き渡る。その先には、

「ひ、ぐうつ……！」

少女がいた。

成人した男たちの、胸元に届くかという大きさ。粗末な布切れと、首輪をつけて、強引に歩かされてきた。

「いひゃいっ！」

長い金髪、森の新緑を思わせる翠眼、薄いクリーム色の肌、そして特徴的な、長く尖った両の耳。幼くも端正に過ぎる顔立ちで、頭にはまばゆく輝く精銀の髪飾り。

エルフの少女の首輪を率いて来るのは、狼の顔立ちをした、二本の足で歩く毛むくじやらの【亜人】だった。赤錆び、無骨な骨で出来た鎧を着て、ひたひたと素足で向かってくる。

「コ、コボルトっ！？」

「な、なんなんだ、おいっ！」



仮面の男たちが一斉に身を引く。

コボルトが「ルル……」と犬歯を剥き出し、集まった男たちを睨みつける。ギヂツと歯を鳴らし、手にした鎖を投げるように放った。「あ、ぐっ!」

エルフの少女が床に転がされる。

ドレスの女が歩み寄り、膝を折って手をかけた。

「みなさま、こちら、純血エルフ種の生き残りであられる、リーアヒルデ王女です。フフ、最低落札価格は、一千万から如何でしょうか……?」

「ひっ!」

上向きにされた王女の顔。

見る者にとつては、嗜虐芯をそそられる香りをたっぷり孕んでいた。男達は魂を抜かれたようにリーアヒルデを見つめる。一人を除いて、女の唇が何事かを紡いだことに気がつく者はいなかった。

仮面に秘められた【魔石】が呼応する。その力を満たしはじめ。「……は、はっ、はははははははは。これは、いやはや、おもしろい……」

「実に、実にいいでは、ありませんか、なあ?」

「やつ!」

不穏な気配を感じたリーアヒルデが、くしゃと顔を歪めた。男たちの眼下から逃げようとするも、コボルトが鎖を引けば、再び転がるだけだ。

「けほっ!」

苦しげに咳きこむ声に対して、男たちが嘲笑う。

「ひははっ、愉快的催しですなあ。低値で入札をいたしましょうか」「あー……。では千二百」

「千三百で……」

「いやいや、過去の繁栄とは儚きものですねえ」

仮面に付与された【魔石】が理性を溶かす。値は天井知らずに伸びていく。

「さて、みなさま」

うつすらと、女の口元に笑みがこぼれた。感情のなかった紅い瞳に、ぼうつと怪しげな色が浮かぶ。

「本日は納得いくまで、直々に、商品をお確かめいただけることを推奨してまいりました」

そう言つて、液体のたゆたう小瓶を取りだした。リーアヒルデが全身をふるわせ、ぽかんと口を開いたまま動きを止める。

「【水】をさしあげましょう。王女さま」

口をこじ開き、小瓶の液体を強引に流し込む。

「ご気分は如何？」

「……………あう」

リーアヒルデは、ぼうつと気が抜けたように宙を見上げていた。魔法にかかったように、首を傾げてみせてから、それから自分を見下ろす、情欲に染まつた視線と向き合った。

「……………なんだ、あの【水】は」

あらかじめ【魔石】を取り除いていた男だけは冷静だった。そして、その思考を遮るように、ドレスの女が近づいた。

「貴方は、入札に参加する気がございませんの？」

「ああ、結構だ。テメエが持つてる薬の成分と、効能のほうに興味があるからな」

「残念ですが、こちらに関してはお答えできません」

「そうかよ、なら、自分で調べるとするか」

口元が吊りあがる。その手に、半分ほど中身の減った小瓶が踊る。  
「なるほど？ 麻薬というよりは、【魔】に起因する成分が強いよ  
うだな」

ふたたび手に落ちたとき、女が短い悲鳴をあげていた。

「いつの間につ！？」

「手癖が悪いのが、売りの一つでな」

平然と嘯く。小瓶をわざとらしくスーツの内にしまう。

「……お客さま、無事にお帰りいただけになりますわよ?」

「最初から期待しちゃいねえさ」

「あら、そう?」

女が小さな笛を取る。音の無い響きがしたのと同時、ホールと廊下を?ぐ扉から、武装したコボルトたちが集団で現れる。

冷酷に、ドレスの女が告げてきた。

「まったく、困ったネズミだわ。増えるまえに、駆除しておかなくちゃねえ……」

「同感だ。もう遅いけどな」

女の言葉を制す。

手首の裾から、鞘に収まった漆黒のナイフを抜き放ち、床上に突き刺した。

『 』 【時空】を知る我、命ず。 > 彼方へ通じる扉、此処こゝに生ぜしやうよ く 』

## 項目5：正当防衛の際に関する事柄。

呼応する。

漆黒のナイフの刃先が煌き、言葉に秘められた概念イメージが展開。

ナイフの上空が揺らめくと同時、声が落ちてきた。

「遅かったな、ジーク」

そして、女の言うネズミは、颯爽と現れた。

ブーツの先で一步、韻を踏み、片膝をついた後に立ちあがる。

身につけた衣服は黒づくめ。蒼髪・蒼瞳の若い男。腰に帯びた長剣とはべつに、持ち柄のついた短刀を二本握<sup>マインゴースト</sup>っていた。

「死んだかと思ったぞ」

「金を貰うまでは死なねえよ」

「ははっ、お前らしい」

エリオットが口端を緩め、手にした短刀を二本、投げてよこす。

「首尾はどうだ？」

「エルフを狂わせた元凶らしい薬物は回収した。詳細はその女が知ってそうだ」

「上出来だ。あとは片付けるだけか」

ジークハルトが短刀を抜いて構えると、エリオットもまた、輝ける白銀の刃を現し、一步距離を詰めた。

「ご婦人、抵抗がなければ痛い目にあわなくて済みますよ」

見栄えのする二枚目の顔立ちが、いつそ清々しいほど、爽やかに笑う。

さらに一步。黒ドレスの女が気圧されたように悲鳴をあげた。

「そ、その男を止めなさいッ!」

武器を手にしたコボルトの一体が、忠実に襲い来た。

間合いに入る。やや赤錆びた感じのする片手斧を落とす。

ざっくり。簡素な手応えは、真っ赤な絨毯を裂いた音。



呼応する。

短刀より【炎】が舞いあがり、火花と化して爆散。  
鋭利に研がれた刃が二本、コボルトの肉と骨、さらには粗悪な革  
鎧ごと食らい尽くす。

「ガ、ア、アギイイイ、ッー!」

気が狂ったような咆哮をあげ、手にした斧を振り上げるも、  
「おせえよ」

斧が落ちる前に、短刀が、腹を斜め十字に斬り裂いた。

血肉が一瞬で焦げ、骨が砕ける。くすぶる音と匂いが立ちこめ、  
絶命した。

呼吸をいくつも終えないうちに、襲いかかったコボルトの死体が  
合わせて四体。

二人は無造作に剣を振るい、向き合った。

「相変わらず熱い殺し方をするな。ジーク」

「うるせえ。そっちこそ少しは加減しろ。俺の服にまで返り血つけ  
んじゃねえよ」

「実は最近、書類仕事が多くてな。身体を動かすのは久しくて、  
エリオットが笑いながら、屍を乗り越える。」

「歯止めが効かん」

ひゅうっ、長剣が風を斬る。嬉しそうに笑い、さらに一步。

残るコボルトの進撃が止まった。敵わぬと知ったか、恐れたよう  
にドレスの女を見た。

「……な、なにをしているっ！ いけっ！ いきなさいっ！」

命じ、女は単独で逃走した。余裕などない。必死に、息荒く、廊  
下と繋がる扉を開けた。

その瞬間、

「はい、ごめんなさいね」

「ぐ、はッ!？」

後ろに吹き飛んだ。ドレスの女を蹴り飛ばして入ってきたのは、

紫色の髪をなびかせ、軽装の防具を身につけた、褐色肌の美女だった。追い討ちをかけるように踏みつけ、にっこり笑顔で言いきった。「動くと言います」

場は一瞬で決着がついた。残るコボルトもすべて物言わぬ屍と化し、ジークハルトを除いた男たちは、仮面を外され一堂に集められた。ドレスの女もまた、身動きできぬよう縄で縛りあげている。

「エリオット様」

「どうした？ フィノ」

現れた美女は、なにかに気がついたように瞑目し、耳に両手を添えていた。

「……外を見張っていた姉様より【声】が届きました。周辺に危険は無いとのことで、まもなくこちらに合流されるそうです」

「そうか。ご苦労だったな」

「……おい……貴様っ！ おいつ！」

「ん？」

仮面を外された男たちが、緊張に耐え切れなくなったのか、エリオットを指さす。

「きつ、貴様らは、何者なんだッ！」

「そっじゃ、ワシを誰だと思っておるかアッ！！」

「……やれやれ。フィノ、説明してやれ」

「はい」

命じられた女性が前にでる。一枚の書類を取りだして、書かれた内容を宣言する。

『依頼者：ゲイルフリート・トラバント・フォン・ノインス

依頼対象：冒険者ギルド『ニーベルンゲンの指輪』

および『ギルドマスター』エリオット。

依頼内容：魔都にて、近々に開かれる、

ブラックマーケットの制圧・殲滅・実行者の逮捕。

そこで売買されるであろう、エルフ族の秘法の回収を命ずる』

その内容は、場にいた男たち、全員を凍らせた。

「……こ、国王、だと……？」

「はい、直々のご依頼ですよ。そういうわけで、どいてください、ねっ！」

「ぐふっ!？」

フィノが男たちを遠慮なく蹴り飛ばした。突き進み、その奥で果然とする、エルフの王女の元へ歩み寄った。膝を曲げて、頭を撫でる。

「ごめんなさい。もう、大丈夫よ」

金の髪、翠の瞳、粗悪な服のあちこちが破れた姫君を、優しく抱きしめる。

「……ふええ……」

弱々しい声と共に、じわり、と涙が浮かぶ。

つうつと、頬を落ちていき、それから両手を伸ばして抱きついた。



## 項目6：支出は、常に不足の事態を考慮すること。

如何に優れた財宝でも、心から欲し、求める者の手に届けねば輝くことはない。財宝に価値を持たせるには、正しく、宝の真贋を見極める手が必要だ。

職人街の一角にある、小さな鑑定店。

若き店主ジークハルト・ワーグナーは、その手の一つだと自負している。

「……ふあ」

昼前、眠たげな欠伸を浮かべて、ジークハルトは部屋の扉を開けた。コーヒーを入れたマグを手に、整然と物が置かれた店内を歩く。表玄関の鍵も開け、看板を『営業中』へと裏がえして部屋に戻る。

昨晚に着ていたスーツ姿ではなく、量産品のシャツに黒のベストを重ね着して、下は作業ズボンというラフな格好だ。

「飯は……。後でいいか」

少し寝癖が残った茶髪をかきつつ、壁にかかった時計を見て椅子に座る。コーヒーのマグを傾けると、熱くて苦い味わいが、口の中いっぱいに広がった。

「さて、仕事だ」

手袋を両手に嵌め、右目の上に片眼鏡モノクルを乗せる。鑑定するのは、昨晚ドレスの女から盗んだ薬の小瓶だ。透明なガラスの内側に漂う、なんらかの【水】を見据える。蓋を開き、手で扇ぎながら慎重に匂いをかく。

「無臭か。ただの水ってこたねーよな」

昨晚、この水を飲まれた姫君は、まるで洗脳されたかのように、ぼんやりしてしまっていた。

「……まあ、口にさえ含まなけりや大丈夫、か？」

あとはじっと、片眼鏡越しに向き合う。すると道具に秘められた【魔】が呼応し、【水】に秘められたイメージをジークハルトに伝

えてくる。

液体は次第に血のように赤く染まっていく。赤い色は、使用者に  
対して害意を与えんとする意味合いが強い。

「毒か、あるいは一種の媚薬か」

思考を続けながら見据える。

「エルフは【魔】に強いはずだしな。精神を惑わし、乱される状態  
にはなりにくいはずだ。それなら、エルフに特別な効果をもたらす  
薬ってこともある、か……？」

あきらめず、さらに赤くなった液体と向き合う。無味無臭で、成  
分を詳細に確かめられない以上は、片眼鏡モナクルの力だけが頼りだった。

「……ん？」

ジークハルトが顔を近づける。【魔】が込められた片眼鏡へと、  
一心に意識を費やせば、小瓶の中央に【渦】が巻く。

「……なんだ？」

【白い風】のイメージが、小瓶の口元へと吸い込まれ、そのまま

【渦】へと飲まれていった。

「こっちのイメージは……。俺の、片眼鏡か？」

解明する、明らかにする　　白。

未知の物を究明したときの開放感　　風。

それが小瓶の中に吸い込まれている。と理解した時に、不意に視  
界がぼやけた。正しく言えば、水が赤く見えなくなった。

「なっ!？」

何らかの【魔】が、片眼鏡に影響を及ぼしている。慌てて小瓶の  
蓋を閉ざしてから、再度凝視する。だが一切の反応が消えていた。  
片眼鏡に秘められた【魔】が消えたのだ。

「おい……」

試しに他の鑑定済みのアイテムを見るも、まったくイメージが浮  
かんでこない。

「……………嘘だろ？」

呆然としつつ、ジークハルトの頭脳は働いていた。目の前にある

【水】は乾きを癒すためのものではない。あらゆる他より【魔】を吸収すべく、本質を【逆転】させられた液体だった。有用性など一切あるうはずもない。

「クソッ！」

アーティファクトは総じて高価だった。品によつては家が一つ建つてしまうほどだ。ジークハルトの片眼鏡も安くはなかったし、修理をするには、専用の付与師エンチャンターと呼ばれる職業が存在するのだが、その料金もまた高い。

「ふう」

大きいため息をこぼしたジークハルトの口元には、無意識らしい笑みが浮かんでいた。しかし、鋭い瞳だけは笑ってない。小瓶を掴んで振りかぶる。手から飛んでいこうとした。

『短気は損気じゃぞう』

しかし、寸でのところで動きが止まった。

薬ビンを投擲しかけた斜線上。棚の近くに、一枚の老人の肖像画が見えた。

三角帽子とローブを身に着けた格好。その手にはビールジョッキ。顔はやたらと赤く、右下には小さなサインで『ワーグナー』とあった。

「クソジジイ」

肩の力を抜いて、手にした小瓶を机に戻した。何気なく指折り数えると、

「もう、四年も前になんのか……」

昼を過ぎた空は、ほんの少し、雨曇が浮かびはじめていた。

窓の外を見つめながら、ジークハルトの右手は腹部に添えられる。若い店主の顔に、じわりと、古傷が痛んだような表情が生まれていた。

## 項目7：己の親は選べぬが、己の師匠は選ぶべき。

\* \* \*

ガキには過ぎた金だろう？

依頼主であつた王城の騎士に裏切られ、路地裏で腹を刺された瞬間、哄笑するような笑い声が降ってきた。

殺してやる。確かにそう言った。しかし両足はぐらついて、機能を失つたように倒れ込んだ。ちょうど遠くから雨の音が聞こえはじめていた。

ふたたび目を覚ましたのは、月が浮かぶ深夜だ。気を失っていた間はずっと、ドブネズミのように雨に打たれていたらしい。ゴミの入り混じる腐臭が鼻をついた。ハエも集っていた。荒れた石畳みの地面には、いくつもの真新しい水溜りがあつて、夜空には綺麗な星が映っている。

「……う」

顔の側に飛びまわるハエを追い払おうと手を振れば、ジャラと鳴る袋が落ちた。

開いてみると、奪われたはずの金貨が丸ごと入っていた。

「……………」

眉をしかめ、刺された腹部に手を添えると、凝固した血液が剥がれ落ちる。傷口は綺麗に塞がれているが、手当てをしたらしい痕は無い。

「なんなんだ……………」

少年は首を傾げた。いつそ、親切な神様でも通り過ぎていったのか。とさえ思った。

「……はっ」

くすんだ笑いがおちる。神様、ねえ。

笑えば、身体の奥底から熱が滾るような感覚を覚えた。心臓に手

を添えると、どくん、どくんと、自然に脈を打つ。盛大に腹の虫が鳴いた。

「なんか食い行くか」

少年は、ゆっくりと立ちあがった。歩き出す。

表通りに出てから、馴染みの安酒場に入ろうとした時に、

「少年、一杯おごってくれんかの」

かけられた声に振りかえれば、そこには妙ちくりんな老人がいた。ボロのローブを着て、頭には不思議な尖がり帽子を乗せていた。命があつたせいで、気持ちが楽になっていたのかもしれない。言われた通りに奢ってしまった。

少年が馴染みの安酒場に踏み入ると、酒ビンを持ち、手をあげて叫ぶ声がある。

「よお、ジークウ！」

「……ジジイ」

「嫌そうな顔をするでないわ。こっちに来て、いっぱい付き合えいっ！」

「うつせえ」

無視してカウンター席に座ると、勝手に隣の席にやってきた。ジークハルトの背中を、ワグナーと名乗った老人が景気づけるように叩く。

「なにしやがる！」

「怒るない。本日も講義をしてやろう。テーマは『マナ・ポーション』じゃ！」

「……はあ？」

「賢者の助言をタダで聞けるとは、おぬし、運がええぞお」

「頼んでねえ。つーか誰が賢者だ。この酔っ払いが」

「では、年寄りの長い話、はじまり、はじまりじゃ！」

「聞けよ！」

ワグナーはまったく気にせず、好き放題に話していく。ジーク

ハルトは相槌を打つ代わりに、舌打ちを一つくれてやる。

「……メシがマズくなる。マスター、鶏の手羽先を丸ごと一つくれ」  
「ほお、羽振りがええのう」

「うつせーな。昨日拾ったアーティファクトが、ようやく換金でき  
たんだよ」

「おおー、そりゃあめでたいの。で、どれぐらいの儲けになった  
んじゃ？」

「答える義理はねえ」

「なんじゃ、ケチいのお」

ワグナーは言つて、ビールジョッキを、ぐびつと煽った。

「ぶつはーい。んでは講義をするかの」

「必要ねえ」

「なら適当に聞き流しとけい」

「チッ」

ワグナーが酒ビンを煽る。ジークハルトは啜えていた鳥の骨を  
吐き飛ばした。

「マナ・ポーションは大変貴重なアイテムじゃ。今では > 精霊の  
霊薬 < なる愛称で、王城のギルドが販売しておるがのう」

「一瓶で十日はメシが食えるな」

「うむ。バカ高いじゃろう。何故だか知っておるか？」

「……量が多く取れねえからだろ」

「半分正解じゃ」

ワグナーが、ちちち、と指を振る。

「残り半分は、エルフとの協定があるからじゃ」

「協定？」

「うむ。南西の森に住まうエルフ族は、マナ・ポーションの源泉と  
なる『精霊の泉』を確保しとるが、その対価として、この国から生  
活用品を支給してもらう約束を交わしておる。時が経ち、今ではエ  
ルフ族と取引したマナ・ポーションは > 精霊の霊薬 < として、  
街中に流通されておるわけじゃ」

「……それが、協定つてのと、どう関係してくるんだ？」

「わからんか？ ヒント出しちゃろうか？」

「うっせえ、話しかけんな。マスター、追加で……」

取り出した銀貨が数枚。鋭い瞳がしばし止まった。

「……おいジジイ。その協定つてのは、昔から『物々交換』なんだな？」

「そーいうこつたの」

会得がいったように、ジークハルトは頷いた。

「なるほどな。交換したマナ・ポーションは、エルフの手から離れりやこつちのモンってわけだ。安価な日常品と交換したアイテムを、俺たち冒険者に高値で売り捌いてるわけだ」

「正解じゃ。>精霊の霊薬< を『ギルドマーケット』で販売する値段を決めるのは、貴族たちじゃ。よって、元手がタダ同然の商品を、いくら吹っかけようが構わんってこつたの」

「ハッ、貴族つてのは碌な連中がいねえな」

「まあ。時にジークハルトよ。おぬしが拾ったアーティファクト、そいつを売った先は何処じゃ？」

「……ギルドマーケットの、鑑定師グレートファハテンに決まってるんだろ……」

答えた言葉は低く、そして苦痛に満ちていた。

売り買いの値段は相手に一任せざるを得ない。それでも、これだけの金銭を得られたということは、答えは一つだ。

「恐らく、おぬしが売ったのは、よほど質が良かったんだろっのう」

「黙れよジジイ。メシが不味くなる」

殺気を込めて睨む。ワグナーは「すまんの」と一言だけ呟いた。そしてビールジョッキを掲げ、ぐびぐび飲んだ。

「ぶあっ！ ジークハルトよ。おぬしは頭が良い。冒険者なんぞ止めて、どこぞのギルドにでも入って、王宮での働き口を捜してみたらどうじゃ？」

「貴族共に使われるぐらいなら、死んだ方がマシだ」

「傲慢なやつちの　ぶっはあっ！」

「……うつ！」

酒臭い息に眉をしかめ、ジークハルトもまた吐き捨てる。

「ジジイ、今日の講義は終わりか？ 金にならねえ、腹はふくれねえ。おまけに気分は悪くなる。最低の内容だったな」

「む！ 年寄りの話は聞いておいて損はないのぢや！ いついかなる時、役に立つかわからんからの！ ほれほれ、情報量として、その手羽先よこさんかいっ！」

「っざけんな！ こいつは俺のだっ！」

「ならば追加注文ぢや！ 骨付き肉を追加で五本！ 代金はそっちのガキ持ちでっ！」

「五十歳下のガキにたかんなジジイッ！！ テメエこそ自分で稼げ！！」

「うーむ、この前も迷宮に挑戦したんじやがの。腰が痛うなったんで、早々に帰ってきたわ」

「いつそ死ね！」

「ジジイには、いささか辛いわ！ ふおーふおふおふおっ！」

ワーグナーは、冒険者としては最悪の腕前で、性格も相当に残念だった。

そんなダメ老人が、もがもが肉を食らいつつ、ふと真剣な眼差しになって言う。

「ジークハルトよ。おまえには、仲間はおらんのか？」

「いらねえよ。んな面倒くせえモンはな」

もう、宝の分け前で裏切られ、殺されかけるのは御免だった。それだから、ワーグナーとも酒場だけの付き合いで、共に遺跡に潜ったことは一度としてない。

「ジジイ、この街を表す言葉を知ってるか？」

「ん？」

「生も死も、気品はあらず、ってな。どう生きようが俺の勝手だ」

「……ふむ。まあ、それもよいか。若さ故じやな」

ワーグナーは、空になったジョッキを意味もなく揺らす。



そしてまた、好き勝手に語りはじめた。

「ついでに、もう少しエルフのことを教えてやろう。森に住むエルフの種族は【魔】に特化した能力を持つ。彼らはひどく閉鎖的な種族じゃが、それには体質的な要因もある」

「連中は、俺たちより【魔】の消耗が激しいって聞いたことがあるぜ」

「そうじゃ。生活の水として、日常的に精霊の泉を用いておる故にのう。その【水】が無ければ、彼らとて生きてゆくのが困難なのじゃ」

ふらふらと、空になつた酒瓶を煽り、語っていく。

「故に精霊の泉の存在は、秘中の秘。エルフ達の間でも、王族にっらなる者にしか詳細が伝えられとらん」

「やけに詳しいじゃねえか」

「伊達に、長くは生きとらんでな」

「そうかよ」

目つきの悪い少年は、適当に聞き流し、残った最後の肉を手にとった。

「スキありッ！」

ワググナーが、ジークハルトの酒瓶をひょいっと取り上げる。一気に飲み干した。

「んなっ！ おいジジイ！！」

「ぶへーいっ！ ちなみに【魔】というのはあ、言葉を用いることで【己の精神を構築している精霊】と接続リンクするのじゃ！ 命令コードは仮物質サブオブジェクトとなり、【自然界を構築している精霊】の資源リソースと結びつくことで実体化するっ！ それが【魔】じゃあゝい！」

「やかましい！ クソジジイ！ いい加減にしねえと殴るぞ！」

「そして最後はあ！ せつくす！ について！」

「ぶはっ！？」

酔いが回ってきたらしい。

驚いたジークハルトが、半端に砕けた肉を口から吐きこぼす。ワ

「グナーが「ひよっひよっ」とか言いながら、怪しく指先を動かした。息荒く、陶醉したように語りだす。

「基本的にい、体内の魔力は、【自然界の精霊】と同調することで時間をかけて回復させるわけじゃがアツ。対象が強い激情を放った瞬間ツ！ すなわちオスの精子を、体内の深いところで受けとめることで、【魔】を回復させることも可能なのじゃあああいつ！

メスが総じてオスよりも魔力が高いのは、そおいうことおおおー  
ーッ！」

「黙れエロジジイッ！」

「魔女っ娘が、【魔】を使いまくった後はチャンスぢやぞ。本能的に、やらしー気分になっておることが、ワシの長年の研究で分かっ  
ておるツツ！！」

「んなもん研究してんじゃねえーッ！」

「ごす。つと殴ったら倒れた。

息をしていたのが、残念だった。

\* \* \*

「……あー、クソ、ムナクソ悪い」

過去の回想から戻ってきたジークハルトは、眉間に指を添えた。

深く椅子に身体を預け、小瓶を掴み左右に揺らす。

「つまり、エルフの王女は、あの時『喉が乾いてたわけ』だな……」

昨晚、エルフの王女が急変した様子を思い出す。

【魔】を吸われる【水】を飲まされて、心ここにあらず、という  
状態だった。

「……エルフの連中がやられたのは、『精霊の泉』の水源を突き止  
められて、本質を【魔】で変化させられたせいだ。この小瓶に入っ  
てるのが、恐らくその【水】だろうな」

一見しては、無色透明な、ただの水。

本質は【魔】をたっぷり秘めた、エルフ達の日常生活における必

需品だ。

それが性質を【逆転】させられてしまった。飲めば逆に【魔】を失ってしまう【水】へ。

「エルフの純粋な肉体能力は、人間以下って話だしな。【魔】が使えないエルフなんざ、赤子を捻るようなもんか」

机の上に置いたマグを傾ける。少し冷めたコーヒーの苦さが眉間を貫いた。

「もう少し推測するなら、一気に変化するよりは、地味に混ぜてつたんだろうな。そうなると犯人は、多少なりともエルフの連中と接点がある奴らか……」

エリオットが言っていたことを思いだす。

犯人は、王城に関係のある貴族かもしれない、と。

「……無理に考えることなんざねえか。エルフが【水】を取引するのは王城の連中だしな。私欲に溺れた奴が【水】を独占しようと考えてもおかしくねえ。ただ、水源の本質を変化させても、それを元に戻す必要があるよな……」

かぶり  
頭を振る。思考を止める。

「俺の知ったこっちゃねえな。報酬も受け取ったし、これ以上は、余計なことに首を突っ込む義理もねえ」

マグを逆さにして、一気に黒い液体を飲み干した。

「っし、通常営業に戻るとするか」

言って、片眼鏡モリクルを掴んで思いだす。

「……そうか。壊れてたんだったな」

大切な商売道具は、【水】に力を奪われたままだった。

「エリオットの野郎、あとで」

カラン、コロン、カララン。

呪詛の念を込めたとき、ちょうど店の扉が開いた。反射的に「よし、いいところに来たな金よこせ！」と顔をあげれば、そこには

穏やかな顔をした褐色肌の美女が立っていた。

「こんにちは、ジークさん」

「……フィノ」

昨晚『動くと潰します』宣言をした女性だった。今は色気のない革鎧ではなく、膝下まである白のロングワンピースを着て、右腕には編み模様のバスケットを抱えていた。本人の美貌とも相まってとても華やかである。空いた手の方で深い紫の髪を撫であげて、にっこり、花が咲いたように微笑んだ。

「お仕事中でした？」

「いや……」

怒りの行き場を失って、曖昧に手をあげるジークハルト。その様子が「元気が無さそう」という風に映ったらしい。心配そうに見つめられる。

「大丈夫ですか？」

「気にすんな。あー、ちょうど鑑定の目星がついたとこだ」

「そうでしたか。さすが、仕事が早いですね」

「まーな……」

追加料金よこせ、とは言えなかった。

「あつ、ジークさん」

「なんだ？」

フィノが、手に持っていたバスケットを机の上に置いた。かぶせていた布を取り払うと、ふんわり、甘い匂いが漂った。

「パイを作ってきたんです。よかつたら食べてください」

「助かる。今日はまだ、マズいコーヒーしか飲んでなくてな」

「もしかして、起きたばかりですか？」

「ああ」

ジークハルトが頷くと、フィノは「良い事を思いついた」とばかりに両手を合わせる。

「よければ、私がご飯作りましょうか。ここに来る途中で市場の方から、タマゴとか、お野菜を分けて頂いたんです」

「いいのか？」

「はい。エリオット様は、朝から登城されていまして、夜まで帰ってこないそうですから」

「偉くなつたもんだな。最初はしがない冒険者に過ぎなかったヤツが」

「本人は、今もそのつもりですよ。三年前と変わらずに」

「……そうか、結構経つんだな」

エリオットがこの街に訪れたのは、三年前。

ジークハルトが冒険者から足を洗い、鑑定業を営みはじめた年でもあった。エリオット自身の見栄えがよく、剣の腕が異常に立つこともあったが、連れ立っていた『姉妹』も美女ばかりというのもあって、その名は瞬く間に広まっていた。

「敵多いだろ、あいつ」

「そうですねえ」

「わざわざ『上』を指摘することもねえのにな。一人で、気楽にやってりゃいいのによ」

そう言うのと、フィノは口元に手を添えて、くすりと笑った。

「エリオット様、おっしゃってますよ。ジークさんが、もっと素直に依頼を引き受けてくれたら、自分の仕事が楽になるのにつて」

「勝手なこと言いやがる」

「信賴してるんですよ。王城の鑑定師<sup>グイートアハテン</sup>にだって、ここまで腕の良い鑑定人はいないって言ってますもん」

「大げさだな。俺は器用貧乏な、場末の自由鑑定士<sup>エルサーズ</sup>が似合いだよ」

言いながら、ジークハルトはパイを一切れつまんで、口に放り込む。

「おっ？」

瞬間、茶色の瞳が驚きに染まる。真顔で、短く言いきった。

「美味い。一級品だな」

「でしょ？」

やわらかな店内の雰囲気とは裏腹に。

窓の外は、少しずつ雨雲が近づいているようだった。

## 項目8：蔽蛇ができた場合は、斬り殺す。

現王が座す魔都の城は、平地から伸びた小高い丘の上に建っていた。見張り塔から見下ろせば、魔都ルーインの全景と緩やかにカーブを描く河の流れが見える。その岸辺の一角は、大地がぼつかり抉られており、その場所だけが異質だった。

広がる迷宮の入り口。さらに河の向こうには、緑豊かな森の情景が広がっている。

エルフ達が住んでいた『帰れずの森』だ。

「……じきに陽がくれるな、夜までに一雨くるか？」

蒼髪の男が、濁った具合の空を見あげていた。そろそろ夕方に近い時間で、空には灰色の雨雲が広がりがつつある。

「こんなところにいたのね」

「うん？」

声に振りかえる。黒髪をなびかせ、片方の眼を眼帯で覆った女性が、塔の螺旋階段から顔を覗かせていた。

「バカと煙は高いところが好きね。会議が再開されるわよ。部屋に戻って」

「わかった。にしても、時間は有用に使いたいものだな」

言えば、女性は素直に応じた。

「無理でしょうね」

城の議会議室。広い石組みの部屋には、飾り気のない円卓が一つと十席に満たない椅子が置かれているだけだ。

「それでは、昨日に回収した宝は引き続き、王城の『ギルドマケット』の倉庫で保管しておくということで、よろしいですか」「意義なし」

殺風景な室内に反して、高価な服を着た初老の男たちが、忙しく言葉を交わしていく。

「では、森への調査については、いかが致しましょう」

「最優先の事案でしょう。あの里には、貴重な　＞精霊の霊薬＜となる源泉がありますし」

「うむ。アレは魔都の柱となる、貴重な財源ですからな」

「錬魔師ギルドアルケミィが作っている、代替品ではダメなのですか？」

「効力が無いことはありませんが、まだまだ、改善の余地があります」

「では、やはりエルフの森の調査を行い、原水の状態を確認しないことにはなりませんまい」

話の流れは、一つの方向に傾いていくように思えたが、

「……いやしかし、そのための予算はどうするおつもりで」

「街の地方警備に回しているぶんを、一割ほど回してみては？」

「バカな。自警部隊の予算は今でも足りないぐらいでしょう。それよりも、迷宮の関所に投入されている予算をですな……」

簡単には決まらなかった。

いざという場合の、責任時の押しつけあい。そして予算の出資所の取り決め。結論だけが引き延ばされるやりとりの行きつく先は、

「さて、どうしたものでしょうなあ」

明らかに、場にいた一人に向けられる。

言葉を受けた蒼髪の男は、「まったく困りましたね」と、無難な返事をしておいた。

＞精霊の霊薬＜　という名をつけられた【水】は、非常に高価だった。

失った精神の安定を取り戻し、ふたたび【魔】を発動させることが可能になるアイテムは、一見しては無臭透明の水なので、ニセモノが堂々と出回る品でもある。最悪の場合、毒薬をそうだと偽って、暗殺に使われた前例もあった。

それ故に、基本的には王城と直接に繋がりのある『ギルドマーケット』で、やりとりするのが常となる。これは、売り手にとって都



合がいい。

(……【水】の供給が途絶えれば、城側の権威は大きく落ちる)  
エリオットは言葉を隠し、思考していた。

(だからこそ、今は逆に好機といえる。俺たちにとっても、城の連中にとつてもな)

【魔】は、強力だ。　>精霊の霊薬<　がいくら高価であっても、求める者は多い。

己を際限なく強化することもできるし、逆に相手を衰えさせることもできる。

自然界の火や氷を模した、擬似的な【火】や【氷】を新たに創造することも可能で、応用すれば自らの武器に、【火】や【氷】の【属性】を付与できる。反面、その【属性】の攻撃から身を守ることでもでき、【魔石】と呼ばれる特殊な鉱物を用いれば、その力はさらに増す。

だが、用いれば用いるほどに、精神が疲弊する。

肉体的な損傷はないのに、己の存在意義が分からなくなったり、記憶が抜け落ちたり、ひどいと自我が崩壊してしまう。

【魔】は使いこなせれば強力無比。しかし同時に、諸刃の剣だった。

「　　ット殿！　エリオット殿ッ！」

「……………は？」

気がつけば、ぼんやりと考えに耽っていた。やや焦って怒声のする方をみれば、頬に傷のある男が、真っ向から睨みつけている。

「心、ここにあらず、といったようだなア？」

齢三十をいくつか超えたぐらいの男だった。筋骨隆々としており、白い魚眼を思わせる瞳が来る。勲章をつけた白銀の全身鎧もまた、ギラリと輝いた。室内の視線がすべて、エリオットの顔に注目する。

「……………大変に失礼をいたしました」

席を立ち、頭を下げる。周りから失笑したような声きた。

「どうやらお疲れのようですな。まだお若いというのに」

「申し訳ありません。なにぶん、こういう所には縁のない下賤な身の上でして」

「ほお、その割には、ずいぶん慣れた風に口が回るなア」

「まっただ」

初老の男たちも頷いて、楽しげに、柔和な表情で追いつめてくる。「エリオット殿の噂は聞いておりますぞ。三年前、この魔都に現れてからというもの、破竹の勢いで迷宮を攻略し、今では最も『深淵』に近い男であるとか」

しかしその生い立ちは、ほとんど謎に包まれているとか。

帝都の王族が、妾に産ませた子であるという噂もあるとか。

ここぞとばかり、次から次へ生じる質問に、エリオットは苦笑した。

「単に放浪癖があつて、少しばかり、広く浅く、物を知っているだけですよ」

「そうだろうな。所詮はこの国になんら想い入れなど無い、余所者だ」

吐き捨てるように騎士団長が告げれば、取り成す声があがる。

「まあまあ、レンデル殿。その辺りにしておきましょう。普段、人知を超えた迷宮に対峙している剣聖も、こういう席では心が折れるご様子だ」

「ほお。では我々の闇の広さは迷宮以上と？」

「さもあらん、ですな」

冷やかな笑いがこぼれる会議室のなか、エリオットはもう一度頭を下げて、席に座りなおした。それから、何度も頭の中で組み立てていた言葉を口に出す。

「皆さま。もし騎士団を動かすのにお困りでしたら、私が束ねたギルドを持つて、南西の森の探索、およびその調査を赴かせていただくことは可能でしょうか？」

「ふざけるなよ、蒼毛の」

レンデルと呼ばれた騎士団長が、睨みを効かせてくる。

「南西の森に住まうエルフの領域は、我らが王に連なる者と、その従者のみが立ち入ることを許された地だ。貴様のような、何処の生まれかも知れん者が踏み入れると思うな」

「……失礼いたしました、騎士団隊長、レンデル殿」

一呼吸おいて、言葉が続ける。

「では、我がギルドの者たちは、王宮騎士の手足となって働かせて頂きます」

「なにが狙いだ」

「単に血が騒ぐだけです。未知に対する憧れ、とでもいいましようか」

「はっ、やはり貴様らは、蛮族に過ぎんな」

「返す言葉ありません。ああ、ところで。昨日、私たちが捕らえました女の詳細は、なにか分かりましたでしょうか？」

安い挑発を流して告げると、正面にあるいかつい顔が、さらに陰しくなった。

「なにか、とはどういうことか」

「……どうかされましたか？」

エリオットが聞き返す。さらに言葉を重ねる。

「探索先は『帰れずの森』とも呼ばれる迷宮です。如何にしてそれを突破し、エルフの里を落としたのかは見当もつきませんが、捕らえた女を吐かせて案内させれば、エルフの里や源泉にも、楽に辿りつけるのではないかと思ひまして、ね」

もっともらしい事を言えば「確かに」などと続く声もあがる。

レンデルだけが、苦虫を噛み潰すような顔をした。

「森を案内させるのは、生き残りである、リアヒルデ王女でもよかるうッ!!」

「ならん」

そしてこの時、エリオットの対面、上座にいる壮年の男が声をあげた。

「かの王女が得た傷は深い。我々が近づけば、部屋の隅に逃げだす

程にな」

「……しかし、それは……」

「レンデル。女の正体は分かったのか」

落ち着いてはいるものの、しかしこの場で、最も威厳に満ちた声だった。

場がにわかに、しんと静まりかえる。

「はっ……、いえ、なにぶん、口が堅く……」

「そうか」

するどい灰褐色の眼光が、胸中を貫き刺すように、光る。

「では、ひとまずここまでだな。エルフ族の秘法は取り決め通り、ギルドマーケットの倉庫に保管しておけ。競りに参加していた者たちの処分も、裁判官たちに通達しておくように」

告げる男の声に、わずかな老いは感じられる。しかし、ひたすらに重かった。

「さて、エリオット・ニーベルンよ」

「はい」

「お前のギルドに森を探索する許可を出す。我らが騎士の配下となるのは抵抗があるかもしれないが、引き受けてくれるな？」

「微力ながら全力を尽くしましょう」

双眸が混じり、互いにひとつずつ、相槌を打つ。

「ああ、それともう一つ、貴殿に頼みたいことがある」

「なんなりと」

魔都の王は、うむ、と頷いた。白くなつた髭を撫で、口を開く。

「エルフの王女、リーアヒルデのことだな。先ほども言ったが、不慣れな環境ゆえにか、食事も満足に取らぬし、城中の者とも言葉を交わさぬ。唯一に、おぬしの配下であつた者とは、いくらか言葉を通じていたようだが」

「フィノですね」

「うむ。その者に、リーアヒルデの身柄を頼むわけにはいくまいか」

「国王ッ！ それは我らに信頼がおけぬとッ！？」

レンデルが激をあげる。しかし変わらぬ口調で、魔都の王は言いかえす。

「事情が事情なのだ。仮に捕らえた女がなにも吐かねば、エルフの王女であるリーアヒルデが唯一の生き証人なのだ、わかるな？」

「……ぬ、う」

「いや、確かに王の言質には一理ありましょう」

「そうですな。まずは精霊の泉の原水を、一刻も早くとり戻さねばなりませんまい」

場を集った方々から、賛同する声があがる。さりげなく、王女の安否よりも、泉の水が大事だと言わんばかりだった。

エリオットが密かに笑う。冷静さを装っていた表情が、ここに来て初めて崩れていた。

## 項目9：王女とメイドとの暮らし方

該当項目が不足しています。

その夜、ルーインの街は、バケツの水をひっくり返したような大雨に見舞われた。

表玄関の看板は、当然のように「閉店中」だと告げていたが、そんな時でも平然と扉を開けて入ってくる客がいる。

「よお！ ジーク！」

鈴の音は強い雨音にかき消され、聞こえなかった。客は雨に負けじと叫ぶ。

「昨日ぶりだな！」

「表の看板が見えなかったのか！」

「雨が強くてな！」

ずぶ濡れになったエリオットの側には、連れが二人いた。共に暗色のローブを被り顔を隠していた。

「夜分遅くにすみません、ジークさん」

連れの一人がフードを取り払う。昼に訪れていたフィノだった。

両手に抱えた大きな荷物を、重たい音を立てて置く。

「あ、う……………」

さらに、フィノの足下にひつつく最後の一人。この場では頭ひとつぶん小さい。フードの下から覗くまぶしい金髪と、明るい翠色の瞳が、ジークハルトを恐ろしげに見上げていた。

「……………おい。エリオット、こいつは」

「ああ、リーアヒルデ王女だ。御身を一時、俺達が預かせてもらうことにした」

「どういうつもりだ。ここへ連れてくる必要はねえだろうが」

「実は、少し気にかかることがあってな。俺たちのギルドも安全とは言いい切れん」

「……………だから？ なんだってんだよ」

「明日には、俺も森の搜索で留守にせねばならん」

「知るかつ！」

「俺がいない間、王女の護衛を頼んだぞ」

「おいっ！ ふざけんな！！」

殺意すら込めてエリオットを睨むも、

「ジークさん、私からもお願いします。さあ、リーアヒルデ様も」

「……お、おねがい、しま、う……」

残る二人が揃って、ていねいに頭を下げてる。一步離れたところから「断れんだろう？」と、エリオットが得意気な顔を浮かべていた。

一夜が空けた。

朝が来るのと同時に雨は去ったのか、空は綺麗に晴れていた。

「……ねっ みい」

茶の短髪をかきながら、マズいコーヒーを片手に、店の表に通じる部屋までやって来る。玄関に手をかけたところで、すでに鍵が開いていることに気がついた。

「ふん、ふん、ふふん」

鼻歌交じりに、店の前を簾で掃いているメイドがいた。城中や貴族の屋敷では珍しくも無いが、下街とも呼べる職人たちの住むところには、使いにでも出されない限り見ない姿だ。

「あっ！ おはようございます。ジークさ      ご主人様」

あるうことか、場末の鑑定士の男を、様づけ呼ばわりだった。まだ陽が上がりきらぬ早朝から妙な幻覚でも見てるのか。そんな顔をしつつ、ジークハルトは店の中へ取っつかえず。すると今度は、

「……………あ……………」

廊下に行く扉の向こう。こっそり顔だけ出している、金髪翠瞳の子供と目が合った。

「ひう！」

ジークハルトの記憶では、背中までなびいていた金髪は、今は自分と同じほどに短く、耳元で切り揃えられている。着ている服はあ

りきたりなシャツの上に、大工たちや、その使い走りの少年たちが着る作業用のツナギだ。頭は長い耳を隠すつもりか　>たれくのついた帽子を被っていた。

「フイー……。どこ……？」

「あいな」

ジークハルトが根負けしたように前に出る。途端に「ひっ！」と両肩を振るわせて、部屋の隅に走っていった。おどおどしながら謝った。

「……ご、ごめん、なひゃい……」

まるで母親から離された、力のないウサギ。ジークハルトがまず不機嫌そうに眉をしかめると、目の前の小動物はガクガク震えて、さっと作業机の影に隠れた。

「どうしろってんだよ」

思わずといった感じで呟いた時。

玄関の扉が、明るい鈴の音を立てて再度開いた。

「どうしたんですか、ご主人様？」

「フイーっ！！」

「あら」

エルフの少女が、全力で、弾丸のようにまっすぐ駆けた。ジークハルトの隣を抜けて、途中でこけそうになりながらフィノに抱きつく。受け止めたメイドは、簪を壁際において小さな頭を愛しそうに撫でてやる。

「リアン様、もうお目覚めでしたか」

「リアン？　　ああ」

偽名かと納得する。それから仲睦まじく、抱き合う二人を見比べた。しかし少年に扮したリーアヒルデはともかく、フィノが、メイドの格好をしてる理由はよくわからない。

「フイー、どっか行っちゃったと思ったっ！」

「大丈夫ですよ。私はどこにも行きませんからね」

「えへ」



幸せそうに、白いエプロンの胸元に顔を寄せる。そして、メイドに転職した知り合いは、紫色の瞳を細めて微笑んだ。

「ご主人様。リアン様が目を覚まされたようですし、食事の支度にいたしますね」

「……いいんじゃないか」

「かしこまりました。ご主人様」

恭しく礼をしてくるメイドに対して、ジークハルトは、すごく気まずそうな顔を浮かべる。何気なく手にしたコーヒースプーンを煽れば、いつもより、苦い味わいが広がった。

## 項目10：確信犯である顧客、および知的少女との会話。

奇妙な居候が二人増えたが、やるべき仕事に変わりはない。

朝食を食べ終え、作業机に座って時間を潰していると、鈴の音が聞こえてきた。

「よお、兄さんよ！ 昨日はすげー雨だったなあ！」

二日前に黒のナイフを買い取った、あの露店商が入ってきた。

さらにもう一人、のっそりと、背中に大斧を構えた男がやってくる。太い両腕をむき出しにしており、威圧的な雰囲気隠そうとしない。

「場末の鑑定士たあ聞いてたが、確かに若えな」

「アンタは？」

「この小せえ奴と、何度か組んで迷宮に潜ってる。そんだけだ」

両腕を組んで仁王立ちになる。ジークハルトは椅子に座ったまま、明らかに友好的でない視線を受け止めた。

「話だと、随分腕が良さそうだって聞いてたんだがな。実際どうなんだ？」

「受け取った料金以上の仕事はやったぜ」

「ほお」

どすん、と床が響く音を立てて、大男が椅子に座る。

「あのナイフも、銀貨一枚で買い取ってくれたそうじゃねえか」

「今更返せつか？」

「んなこたねえよ。ただ、相方が他に持ち込んだ鑑定品は、どうなったのかと思ってな。中には良質の【属性】が付与された、レアな  
>妖精指輪く もあつたる？」

「クズ銀の指輪に、カスい【属性】が入った指輪なら鑑定したぜ」

「……んだと？ おい鑑定士、もっぺん言ってみろ」

「三流品だったんだよ、全部な」

ジークハルトは席を立ち、二日前に鑑定した商品を机の上に並べ

た。

「指輪が三点、鎖帷子、杖、ネックレスがそれぞれ一点ずつ。合わせて六点だ。不要な【属性】も解いてやったから、銀貨六枚でまとめて引き取っていい」

「ざけんなッ！」

ドンッ！ と勢いよく机が叩かれた。

「所詮は場末の自由鑑定士<sup>エル</sup>だ。安い料金に見合った、適当な仕事しかしねえってか」

「そう思うなら勝手にしな」

大男の方が、眉間に太い血管を寄せてジークハルトを睨む。その後ろでは、小さい方の相方が「すまんね、兄さん」という感じに苦笑しているが、腹の内は知れない。ともすれば難癖を重ね、あのナイフを取り戻そうという思惑ぐらい、あるかもしれない。

「おい、真面目に鑑定したんだろッ！」

「手は抜いてねえよ。そっちこそ、次はホラ吹いて持ち込むんじゃないぜ」

「なら、その理由を言ってみろっつんだよ！！」

再び机が叩かれる。ジークハルトが面倒くさそうに、息をこぼした。

「さっきからうるせえな。テメェら、この町に来たばかりの新米だろ。浅層ていどのアイテムなら、こっちだって飽きるほど鑑定してんだよ。大方は迷宮の小鬼<sup>ゴブリン</sup>と、【炎】を操る術者が一人つてとこだろ？」

大男が目を見開いた。

「どうして分かる」

「役に立つかは知らないが、覚えときな。小鬼の連中は、気に入ったモンは赤ん坊みたいに口で転がして、自分の印だっている傷をつけたがる。片眼鏡<sup>モリクル</sup>で見りゃ、唾液でマーキングされた後は一発で見抜けるが、肉眼でも結構わかるもんだぜ？」

言って、指輪に共通して残る、独特のひっかき傷を示してみせた。

「ほ、ほお……」

大男が、先ほどの激昂した態度から一変、知性を窺わせる色合いに変わる。隣の男も思うところあったのか、両肩を竦めていた。

「昔は冒険者だっつったな、兄さん」

「ああ。引退する前は、単独で中層以降に潜ってた」

「へえ、たいしたもんだ」

「そいつはどうも。言つとくが、こっちはまともに商売してんだぜ。それに、最初から難癖つける目的の客は、テメエらが始めてじゃないんでな」

「む……」

大男が野太い指を、自らの顎に添える。

「説明も今なら無料にし<sup>タダ</sup>といてやるが、どうする？」

「ははっ、兄さんにや適わねーな、頼んまずぜ。なあ、ダンナ？」

「……仕方ねえ、聞かせてみる」

ジークハルトが、初めて口の端を緩めた。語りはじめる。

「まずはこの指輪だな。低級の小鬼ぐらいなら従えさせられる【使役】の属性が付与している。害を与える目的の『呪い物』は、基本的に人が作る物だ。となれば、連中を操る主がいる」

続けてネックレスと、赤い宝石を乗せた杖を取り、いつのまにか聞き入っていた二人に向ける。

「……で、これがその主だろ？ 【魔】に精神を乗っ取られた奴は、正常な判断ができなくなる。もしくはテメエらみたいな新米冒険者を狙って味を占めた、魔術師くずれの盗賊だ」

「【炎】を使ってきたのが分かった理由はなんだ？」

「色だ。【魔石】は基本、術者のイメージがきっかけで、この世界に実体化する」

言つて、杖に嵌った赤い石を指で叩いた。

「【魔】の威力をてっとり早く高めようと思えば、【魔石】の色を近づけることが、もっとも手っ取り早い。闇に住む小鬼共は【炎】が苦手だしな。こっちの鎖帷子は、連中を閉じ込めておく拘束具、

と言ったところか」

「……フン。なかなかやるじゃねえか」

「そう思うなら、ついでに一つ忠告しといてやる」

「ん？」

すう……と、ジークハルトの瞳に陰が増す。

「お前ら、死体漁りは適当にしとけ。場末の店で処分しようと思うぐらいの度胸なら、近い将来、いつか必ず同じ目に合うぜ」

客である男二人が、揃って気まずそうに顔を見合わせた。

存外、気の良い二人組みらしい。

「そいつは、相手から襲ってきたから奪ってやった、ただ……」

「兄さん、俺らが死体を漁ったのは、アンタに売ったあのナイフの持ち主だけでさ。なかなか、宿代にも切羽詰まる有様でしてね」

「別にかまわねえよ。どっちでもな」

ジークハルトは、少し面倒くさそうに告げる。それから、鑑定したアイテムをすべて二人の前に運んだ。

「ここから東に歩いた通りに、溶鉱炉を持ったクス鉄屋がある。たいた値にはなんねーが、俺の名前出して持ってけ。一日のメシ代ぐらいにはなるからよ」

結局、ジークハルトは料金を受け取らなかった。なんとなく講釈っぽいものを垂れて満足してしまったという感じに、ぼんやりと天井を仰ぎ見た。

「生きてりや、また来るか」

良くも悪くも、善良な人間はジークハルトにとってはありがたい。客の信頼を得ることができれば、鼻屑にして常連になってくれることも多いのだ。

『自由鑑定士<sup>エルサース</sup>』は言うなれば、個人営業の鑑定人だ。専門の試験を突破して、王城と直属繋がりのある、正等な<sup>グイートアハテン</sup>鑑定師<sup>グイートアハテン</sup>ではない。

誰もが名乗れる自由鑑定士は一言で「信用に足りない」わけだが、鑑定師は、その信用に足るぶん、制約も大きかった。

王城直下のギルド機関にしか所属できず、月々で、一定の給金が保証される代わり、個人で店を出したり、鑑定料を決めることができない。だから、鑑定料金が安いだけの自由鑑定士は絶えない。むしろ堂々と、詐欺目的で冒険者に近づく者が多かった。

故に、名が知れた実力者たちは、ギルドの鑑定師にだけ依頼を頼む構図ができあがる。中にはジークハルトの腕を見込んで、お前も鑑定師にならないかと誘ってくる者もいた。

「……お断わりだ」

昔を思い出すように、一人呟いた。

それから、小さな店で、黙って、慎重に、別の遺物アイテムを鑑定していく。開いた店の窓からは、気持ちのいい風が吹き込んでいた。ふと顔をあげる。

「店主と客。俺たちの間柄なんてのは、それが一番だ」

客一人につき対価を得て、日々の腹を満たして生きる。

未来への展望はなく、今だけを見つめる。

求めるものは無く、けれど失わない。

一人で生きるのは楽だった。

「ご主人様」

「……………ん？」

「お疲れさまです。一息いれませんか？」

すっかりメイド服に馴染んだフィノが、優しい顔で笑いかけていた。

「居間の方に、コーヒーと焼き菓子をご用意しました。あまり根を詰めすぎると、倒れてしまいますよ」

「そうだな。リアンは？」

「リアン様でしたら、お部屋ですつと本を読まれています」

「本？」

フィノと、リーアヒルデこと「リアン」は、半ば物置と化していた屋根裏部屋に身を置いていた。

「リアン様、びっくりするぐらい賢いんですよ。こう……、自分の

周りを取り囲むように本を広げて、何冊も同時に目を通されるんです」

「本当か？ あそこにあるのは」

ジークハルトは、壁にかかった老人の肖像画を見やった。当たり前だが、相変わらず赤ら顔で、ビールジョッキを片手に笑っているおかしな一枚だ。

「あそこにあるのは、クソジジイが遺していった難解な本ばかりだぜ」

廊下の先、部屋の奥にある小さな食卓で、三人が席についていた。ジークハルトはここ最近になって『マズくないコーヒー』の存在があることを知った。香りの良い、熱を湛えた液体に口づけ、中央にある木製の器にも手を伸ばす。

「ん、美味しい」

「ありがとうございます」

コーヒーを一口。軽い苦味がクッキーの仄かな甘さに、よく合った。

「フィノ、美味しいコーヒーを煎れるコツみたいなのはあるか」

「愛情です」

「そうか」

さっぱり分からなかった。ジークハルトは、やや手持ち無沙汰に「壊れた片眼鏡」を手で転がしていた。

「ご主人様、それは？」

「俺の商売道具だ。この前の。今は調子が悪いみたいでな」

この前の仕事のせいではないかと、正面を見る。頭には長耳を隠す。たれく。のついたキャップを被り、職人用の青い作業着と、同色の長ズボンを履いて、下町の少年に扮したエルフの王女がいる。「あぐはぐまぐつ！」

すこぶる行儀が悪かった。

小さな手を往復してクツキーを掴み、頬を膨らませるほどに食ら

う。それと同時に、ぶあつい本のページを捲っていく。

「口と手が器用に動くな」

「そうですねえ、こぼれてますけれど」

フィノが作ったクツキーを齧り、視線はひたすら本の上に釘付けに。口元からは、ぼろぼろと絶えずこぼれ落ちる。

「あつ」

青い作業着ツナギの上に散ったものを、ひょいと指で摘んで、普通に口元へ運んだ。

「おい、コイツは本当に王女なのか？」

「そうですね。可愛いじゃありませんか」

「関係ねえだろ、それ」

「もぐぐ」

「リアン。食うか、読むか、どっちかにしろ」

「！っ……はぐはぐ、はぐぐ……っ！」

ぼろぼろ、ぼろろ。ぱらぱら、ぱらら。

「聞いてねえな」

「無駄ですよ。燃料が切れるまでは」

「燃料？」

ジークハルトが訝しそうに眉をひそめる。と、皿の上に乗ったクツキーが、一つ残らず消えていた。てのひらが、カラカラ、カララつと、空しい音を響かせる。

「……あ、う？」

リアンが指先についた粉を舐めながら、そつと、隣に座るメイドを見た。

「ねー、フィー、お・か・わ・り」

「ダメです」

「おねがいー」

「許しません」

「……うう……」

はらり、と哀しそうに本のページが捲られる。それから今度は、



ジークハルトの手元に視線が移った。手にした片眼鏡に興味があるのか、じーつと手元を覗き込む。

「コレが気になるのか？」

「ご、ごめんなひやいっ！」

「怒ってねえよ、ほら」

言いながら、ジークハルトが手にした片眼鏡を投げた。リアンが慌てて両手を出して受けとめる。と、フィノもまた、隣から覗き込む。

「これ　>アーティファクト<　ですね」

「ああ。俺が昔に、知り合いから譲ってもらったモンだ。レンズ自身が【魔石】で作られていてな。コレを通してアイテムを見れば、俺みたいに魔力の薄い奴でも、対象の【本質】が具現化されて見えるようになる」

説明を聞いていたフィノが、アイテムを見て言った。

「でもこれ、【魔】が感じられませんか。なにか外的な要因を受けたりしました？」

「最近、ちよつとな。やつぱ修理しねえとダメか」

「ええ。レンズ部分の【魔石】は、一度分解して再度【魔】を籠めるか、代用品を用意するしかないと思います」

「付与師が必要か、ヤツらぼったくりやがるからな……」  
エンチャンター

それもまた、王城のギルドに勤める鑑定師グイットアハテンと同様の職業だった。  
「職人の絶対数が少なえぶん、修理費が高額なんだよなあ」

ジークハルトが愚痴った時に、

「わたし、できう、かも……」

リアンが言った。恐々と、それでもどこか力強く、見つめる。

「この中に入ってるませきに、【魔】をわけてあげればいいんだよね？　この、えつと……。あ、あーひふあくと？？」

しどろもどろ、自信無さげに、泣きそうになりながら、それでも言葉を続けた。

「わたし、できうかも。この絵本に、やり方　書いてあったから」

リアンが手元に広げた、手にした本を閉じる。

「だから、それ、直せると思いまう」

「本当か？ おまえ、工具を使ったことはあんのか」

「……あう、それは……、ないれす……」

「じゃあ無理だな」

リアンの瞳に、じわりと涙が浮かぶ。

隣に座っていたフィノが、柔らかい金髪を撫でた。

「ええつとですね、リアン様。【魔石】に特定の力を込めるのは、すぐく高度な能力が問われるんですよ。しかも、他者が最初に込めたアイテムに【属性】を上書きするのは、とっても難しいんです。  
魔都でも付与師と呼ばれる専用の職人が、少数いるぐらいで……」

「……フィーも、信じてくれない？」

「あ、いえ、そのお」

「できるもん」

今度は頬をリスのように膨らませて怒る。フィノが困ったように、ジークハルトを見た。

「リアン、おまえ【属性】を上書きすることができんのか？」

「で、できまう！」

「ただし、バラすのと、組み立てるのは出来ないってか？」

「で、できまへん……」

ワグナーの書物を抱えて悲しそうな顔をする。けれど翠の瞳は、どこか期待と切望にも満ちていた。名前程度しか知れない、エルフの瞳と意思が不思議と胸を打つ。

「意外と面白いかもな」

一級品か、否か。ジークハルトの興味を惹いた。

「リアン、それ持ってついてきな」

「ふえ？」

「タダ飯が食らえるのは今日までだ。この店にいる間は助手として働け。お前もアイテムに興味があるなら、できる限り俺から知識を盗んでみる。どうだ？」

まずは、最初の手ざわりを確かめるように告げる。

対する翠の瞳は、より一層輝いていた。

「あ、あいっ！」

「よし」

立ちあがる。職人は足早に部屋をでた。その後ろを、王女が迷いながらも追いかける。

「……あらあら」

一人残された侍女だけが、くすりと笑う。楽しそうに呟いた。

「では。私もお夕飯の支度をしましょうか」

夜が深まっていた。

店を閉店し、食事と風呂も終え、あとは眠りにつくまえに仕事場の道具を整理する。力を取り戻した片眼鏡モリクルのレンズ周りを、水で湿らせた布切れで拭いていた。だまって瞳に乗せると、ガラス越しにぼんやり揺らぐ、世界の色が見える。

「本当に、直しまいやがったな……」

くくつと笑う。一度、力を吸い込まれてしまった片眼鏡の > アイファクト< は、以前と変わらないどころかその力を増している。

「たいしたもんだ」

【魔】と呼ばれる力に優れていた所以なのか、リアンは確かに付与エンチャ師として優れた才能を持っていた。しかし悲しいまでに不器用で、ネジの一本を外すことすら時間をかけた。アイテムの構造を解説すると一瞬で理解するのだが、それ以外の事に頭が回らない。

「一種の天才ではあるんだろうな」

思ったその時に、すぐ後ろで扉が開いた。

「……あ、あの」

ジークハルトが振りかえる。リアンがいた。

まだ苦手意識が根強く残っているのか、扉にしがみついたままだ。「どうした？」

「……」

扉から身を半分だして、ジークハルトを見ている。昼間に着ていた作業着は脱ぎ、今は絹製の、高価なネグリジェをつけていた。

「まだ、おしごと、してまう？」

「道具の手入れをしてるだけだ。今日はもう寝ろ」

「てつだう？」

「よせ、仕事が増える」

「……う」

落ち込んだその顔を見て、疲れたように付け加える。

「悪かった。ところで、なにか欲しい物は無いか」

「へう？」

「おまえが直した片眼鏡は、貴重なアーティファクトだったからな」

「……あ、あい」

「おかげで金が浮いたんだ。無理な頼みでなけりや聞いてやるから、言ってみろ」

リアンの表情に、ほんのわずか明るい笑みが浮く。おずおずと部屋に入ってきた。

「……あ、あのね……」

控えめに、壁にかかった肖像画を指さした。

その先にあるのは、赤ら顔、親指を立てて笑うワグナーがいた。

「このひとに、あつてみたい」

「……どうしてだ？」

「このひとが、あの本を、書いたんだよね」

「わかるのか」

「なんとなく……。このひと、ジークハルトのおとーさん？」

「やめろ、悪寒がする」

思わず眉間が鋭くなってしまう。

リアンが怯えたように身を引くのを見て、ジークハルトは面倒くさそうに付け足した。

「まあ、師匠と呼べないこともねえな」

「ししょー？」

「教えを請った相手だ。役に立つことから、くだらないことまで、いろいろな」

「今もこの街にいるの？」

「いや、もう何年もあつてない」

「どうして？」

「死んだんだろ、たぶんな」

言つと、しばらく間が開いた。リアンは少し迷った素振りをしながらも「どうして？」と繰り返してきた。

「ここは『そういう街』だ」

応えたジークハルトの声には、ほんの少しの苛立ちと、それから苦痛が滲んでいた。

「ジジイは冒険者としてこの街にやってきた。それなら、いつ死んだつておかしくねえ。迷宮の中で朽ち果てりゃ、死体だつて見つからないのも珍しくない」

「ねえ、ジークハルトは……」

リアンが呟いた。初めて名前を呼ばれた。

「この街が、嫌い？」

「嫌いだ」

即座に答えた。

富は一部に集中し、貧困者は命をかけても、その日の飯種を稼ぐのがやっと。中にはエリオットのような例外もいたが、他者を憎く思うよりもまず、この国の有りようそのものが腹正しいと思つていた。だからせめて、ジークハルトは王宮に仕えない。稼ぎが少なくとも、小さな店を続けていることが、言葉無き抵抗だった。

「わたしも、嫌い」

「だろうな」

親族、同類の一族を皆殺しにされた。我欲の詰まった人間に裏切られた。商品として扱われた。そんな境遇にあつて、

「森は嫌だった」

「森？」

「うん。私は【幹】だったから。ずっとずっと、同じとこにいて、同じ本をずっとずっと読んでたの。外に出してもらえなかった」  
「どういうことだ？」

「……ないしょ」

寂しそうに微笑んだ。瞳はうつすら潤んで、一滴だけ、頬を静かに伝いおちていく。

「でもね、だからね。生き残りだって言われても、よく、わかんない」

「そうか」

「あのね。ジークハルト」

「ジークでいい」

「じゃ、ジーク。お願いしてもいいですか？」

「……なんだ」

少し困惑したように返事をする、リアンはゆっくり、笑みをこぼした。

「わたしの、ししよーになって」

項目11：飴と鞭の比率は3：7。

リアンがジークハルトの店に来て一週間が経った。特にこれとい  
って波風も立たず、平穩無事な日常が続いていた。

昼過ぎ、客足が途絶えていた時間に、ジークハルトは随分と冷め  
てしまったコーヒーを飲んでいた。

「まだか、リアン」

「うくつ、ん、ん、んくつ」

机に片肘をつき、酸味の効いたコーヒーを飲んでいる隣で、リア  
ンが必死に手を動かす。

「むずかしいでう、ししよくつ！」

「それぐらい、さつさとバラせ。あと、その呼び名やめろ」

「えー」

新緑の如き翠瞳で見上げられると、それ以上は反論する言葉も消  
えてしまう。なし崩し的に「手を動かせ」とだけ言うと、今度は素  
直に従った。

「むむくつ！」

作業机の上には銀色のトレイが乗っている。精密のネジ回しで、  
細かいパーツに分解された、目覚まし時計の部品が並んでいた。

「遅い。おまえ、本当に不器用だな」

「うう……」

リアンはネジ回しを手に、ふらふらと、危うげに外していく。工  
具の先についた小さなネジを、トレイの上に持っていこうとした時  
だ。

ピンツと机で跳ねて、

「あつ！？」

床の上に落としてしまう。

「おい、無くすなよ」

「あ、あいつ！」

拾いあげようとして頭を突っ込み、今度は「ごすっ！」と派手な音をたてた。ネジを摘んで現れたリアンは涙目だった。

「……おでこ、ぶつけてしまいまひた……」

「なにやってんだ、バカ」

涙目になった、リアンの前髪を持ちあげた。指を近づけ、触れる。

「し、ししょーっ!？」

「痣にもなつてねえ、大げさだな」

「あ、あのっ、ええとっ!」

カラン、コロン、カララン。

リアンが軽く目を回しているときに、店の扉が開いた。

入って来た客は長身細身の女性だった。獣の毛皮で作られたレザーベストとズボンを身につけ、板金の入った硬質なブーツが床を叩く。右目は眼帯で覆われており、左手は常に、腰元にある長刀の柄に添えられていた。

「久しぶりね、ジグ」

「一つに結いあげた長い黒髪が揺れる。」

「……レティーナ?」

ガタツと椅子が音をあげ、ジークハルトが立ち上がった。そんな様子を楽しむようにして、残された瞳が猫のように細くなる。

「ジグ、最近あなたの顔を見なかったから、野たれ死んだかと思つてたわよ」

「こっちのセリフだ。残念だが、そこそこ上手くいってるさ」

ジークハルトが席に座りなおすと、レティーナと呼ばれた女性は近づいた。

「相変わらず、副業の仕事を受けてる。って聞くけれど」

「金があつて困るこたあないからな」

「あまり安請け合いしていると、死ぬわよ?」

ふっ、と笑いながら、ジークハルトの向かい側にある椅子を引き、



浅く腰かけた。

「……で、どうした？」

「そのまえに、私も質問したいのだけど」

レティーナが、ややジト目になって、言う。

「ジグ、あなた。いつのまに子供を<sup>こども</sup>拵えたのよ」

「は？」

レティーナの視線を追ったその先、机の下に隠れたリアンが顔だけ覗かせていた。眼帯をつけていない方の瞳に見つめられると、「ひいっ！」と叫んで、また引っ込んだ。

「すごい美形ね。男の子？ 女の子？」

「うるせえ、勝手に俺の子どもにすんな」

「もう。相変わらずの堅物ねえ。冗談ぐらい流しなさいよ」

にんまり笑ったとき。後ろにある扉が開いた。

「失礼します、飲み物をお持ちしました」

「フイ〜〜っ！」

机の下からリアンが飛び出して、白黒エプロンの裾に、ぎゅむつと抱きつく。

それを見て、レティーナは怪訝そうに、ジークハルトの方を見た。  
「……あ、もしかしてそういうこと？ 連れ子の女性に手を出すなんて、いい度胸してんじゃない」

「だから、ちがう。こいつらは事情があって預かってるだけだっ！」

「そうなの、って……」

フィノの顔に注目する。レティーナは何かに気がついたように、目を瞬いた。

「貴女、蒼髪のギルドにいたわね」

「いいえ。私はただのメイドですよ。剣閃レティーナ様」

続けて、レティーナの視線がゆっくりと、腰元にひつつく子供の顔に向けられた。

「そっちの子は……」

「俺の弟子だ。裏路地で食いつぶれてるところを、拾ったんだ」

「弟子？ ジグの？」

「ああ、付与師エンチャンターの素質を秘めてる。ただ、半端なく手先が不器用な  
んでな。技を仕込んでる最中だ」

「へえ、ジグが弟子を取るなんてねえ？」

レティーナが、くすつと笑う。

今度こそ楽しそうに、女性らしい含みを込めて、少し意地悪く。

「昔の貴方からは想像できないわね」

「うるせえな。冷やかにきたなら帰れよ」

ジークハルトが、ガシガシと髪をかく。反対の手をだして、つま  
らなそうに告げる。

「仕事を持ってきたんだろうが。鑑定物があるなら、さっさとよこ  
せ」

「悪いわね、鑑定の依頼じゃないの。でも、ちょうどよかったわ」  
「なにがだよ」

「実は、付与師を探してたの。貴方の伝手で、その筋の人間がいる  
かしらと思ってね」

レティーナが胸元のベストに手を入れ、ポケットから、てのひら  
に乗るサイズの懐中時計ポケットウォッチを取り出した。ジークハルトの瞳が見てわ  
かるほどに大きくなる。

「……まだ、持ってたのか」

「懐かしいでしょ」

「少しな、借りていいか」

「ええ」

時計を受けとる。懐から片眼鏡を取りだして乗せた時、

「それ、貴方も持ってたのね」

「大事な商売道具だからな」

言いながら、時刻を合わす「リユーズ」を動かした。

くるりと、二つの針が仲良くまわる。

「どこが悪いのか？ 時刻合わせも問題なくできるみたいだが」

「肝心の【魔】の効果が弱まってるみたいだね。一日で時間もズレ

てくるのよ」

「ってことは、中の【魔石】に問題があるな。一度、バラすぞ？」

「構わないわ」

レティーナが頷いたのと同じく、ジークハルトが振り返った。

「リアン、仕事だぞ。はやく来い」

「あ、あいつ！」

フィノにくつついていたリアンが、慌てて駆けてくる。作業着のポケットから、小さな片眼鏡を取りだして、同じように身につける。

「ふふ、可愛い弟子ね」

「見かけは小せえが、実力はあるぜ。お前からもらった片眼鏡、実はちつとヘマして使い物にならなくなってたが、リアンが【魔】を付与して、今は問題なく動作してる」

「へえ、やるわね」

黒の瞳が優しく微笑んだ。ずっと手を泳がせて、たれのついた帽子の上から、リアンの頭をなでる。

「お手並み拝見といくわよ。小さな職人さん」

「あ、あいつ！」

ジークハルトの手に、精密のネジ回しが渡される。

手早く蓋を開いて、刻まれたサインをリアンに見せた。

「職人の名前は、アドルフ・ランゲ。有名な時計職人であると同時に、凄腕の付与師<sup>エンチャンター</sup>でもあった人物だ。この職人が作ったアイテムは冒険者だけでなく、一般人にもコレクターが大勢いる。サインの贋物も多いからな、しっかり覚えとけよ」

「ほ、ほむっ！」

リアンが身を前にだして、サインを見た。ひたすら一心に見つめていると、そこまで見んでいいと、デコが叩かれる。ぴい、と鳥の鳴き声みたいな声をあげて引っ込んだ。

「解説するぞ」

「あい」

「この男が作った時計には【魔石】が込められている。【魔石】は、時計のイメージと呼応して、装備者の速度を高める効果を持つ。影響は微々たるものだが、一瞬の判断が生死を分ける冒険者にとってその効果は大きい」

語って、ジークハルトは懐中時計をバラしていく。まったく危うげなく、細かい部品を、トレイのなかに移していった。

「し、ししょー！　すごいでうっ！」

「やかましい。それより【魔石】の位置を探してみろ」

「うん」

言われた通り、リアンは黙して、時計を見つめ続けた。

「……いちばん、おく。ぐるぐる回ってる、はぐるまに、がちってあたってうトコ」

「テンプ、だ。正しい名称ぐらいは覚えておけよ」

リアンが答えた後も、よどみない手つきで懐中時計の完全分解を進めていく。動力源となるゼンマイを入れた香箱車オーバー・ホールをはじめ、時計の針と連動した二番車、三番車、四番車、そして、速度の伝達と調整を行う心臓部へと辿りつく。

「ここだ」

振り子の原理を持って回転する、テンプと呼ばれる機械の上。隣合わせた歯車の速度をひっかけて調整している『爪先』に、緑色の、極小の【魔石】がはまっていた。

「リアン、この魔石の【属性】が分かるか？」

「んー、【風】かなあ。それに、じかん？」

「正解だ。冒険者からは【時空じくう】と呼ばれてる」

「あら、本当に優秀なのね。さすが、ジグの弟子だわ」

「えへへへへ」

リアンが、てれつと笑う。その顔を、ジークハルトが指ではじいた。

「ぼけつとするな。いいか、よく聞けよ」

「はうあう……」

リアンが、おでこを両手で抑え、頷いた。

「ランゲが作る懐中時計は、精巧ではあるものの、基本的には通常のゼンマイ式と変わらない。だが、これに【魔】を込めると話が別だ。ワーグナーのジジイの本を読んだお前なら理解してると思うがな。【魔】には、わずかながら > 質量 < が存在するんだ」

「重さがあるってことだね？」

「そうだ。ジジイの言い分だと、魔術発動の為の【精霊】には重さがあり、【魔】として概念化されたのも同様だって話だ。実際の炎や水に重さがあるように、人間が生みだした【炎】や【水】にも重さがある」

「あい」

「そして【魔石】に属性化された概念を封じた場合、【魔】の効果が増幅されると同時に、質量そのものも大きく増す」

「あい」

こくん、こくん、と首を振るリアンを見て、ジークハルトも一息つく。向かいに座るレティーナは、反対に首を傾げはじめていた。

「つまりだ。歯車の回転にひっきり、回転数を維持している【魔石】の爪先に重さが増せば、どうなると思う？」

「テンプ本体の回転に、ごさがでまう」

「誤差が出ると、起きる弊害は？」

「ひっかける爪先のリズムがズレて、はぐるまの回転も、一緒にズレていきまう」

「そうなる、どうなる？」

「時計の針を乗せた別のはぐるまも、ズレが大きくなりまう。ズレがひどくなったら、時計として、ただしく機能しまへん」

「正解だ」

ジークハルトが手を伸ばす。軽く、帽子のうえに乗せた。

「えへ」

ほんわか喜ぶリアンに向かい、しかしもう一言。

「お前なら、コイツをどう直す？」

「へう？」

リアンが、きょとんと首を傾げた。

「この時計を、自分が作る立場で考えてみる。【魔石】の効果はひとまず考えなくていい。これを時計として正しく使えるようにするには、どうする？」

「ませき、をつかわず、フツの部品をつかいまう」

「不合格だ。もっとよく考えてみる」

「あい」

リアンが、そつと静かに目を伏せる。

その様子を見て、ジークハルトの表情に少し、笑みが浮かんでいた。

しばらく何も言わずに、ただ答えを待った。さして時間もかからず、リアンは翠の瞳を開いて、ジークハルトの顔を嬉しそうに見上げる。

「最初から、増える重さ、質量を考えてつくりまう！」

「正解だ。やることはわかったな？」

「あい！」

リアンが元気よく手をあげる。だが向かいに座るお客は、首を傾げるばかりだった。

「……えーと、どういうことかしら」

「へえ、レティーナは分からなかったのか？」

「うるっさいわね」

隻眼の女剣士が、思いつきり眉をひそめていた。剣呑な気配を滲ませた様子に、リアンが怯えて机の下に隠れようとする。ジークハルトがニヤリとして、その背中を掴みあげた。

「隠れてんじゃねえ。説明してやれ」

「あ、あいつ。えーと、えー……。し、ししょおっ！」

「おまえな。客に説明すんのも大切な仕事だぞ」

「らってっ！っ！」

泣きつくリアンをあしらいながらも、店主はどこか楽しげだった。

「つまり、このアーティファクトはもともと、【魔石】を組み込む予定で考案されてたわけだ。ただし、肝心の【魔石】に力を込めすぎると、テンプレを調整する部分が重くなり、回転数がズレてくる。そうなる時計として使い物にならない。元来の道具が正しく力を発揮しないと、【魔】の概念も発動せず、【魔石】に付与された【速度上昇】の効果も失われる訳だ」

一息つき、すっかり冷めたマグの中身を煽った。

「で、こいつの場合は、長年の使用で【魔石】に封じた概念の付与が薄れてる。歯車を回転させるテンプレ調整部に重さが足りず、勢いがつけられないわけだ」

「いいわよもう。ようするに、修理しないといつか止まってしまいうわけでしょ」

「ま、平たく言えばそうだな」

レティーナの、明朗解決な答えに苦笑する。

「ただし、適当に同じ大きさの【魔石】に変えてもダメだ。込めた【魔】のバランスが正しくなけりゃ、コイツは機能しない」

「はいはい。つまり【魔】と時計の双方に熟知している職人が必要で、ここには、その職人が揃ってるわけでしょう？」

「そういうこつたな」

ジークハルトは言って、分解した部品を集めたトレイを、リアンの前に置いた。

「どうだ、直せそうか」

「あい、できまう」

小さな両手の、小さなひとさし指。

トレイの上に乗った【魔石】をはめた部分に、ちよこんと触れた。すう、と息を吸い込んで、言葉を発する。

『【精霊】を知る我、命ず。』

摩擦係数を鉄より有し、対象となる道具の強度を上昇。  
炎から【炎】を生成する。鉄と化合し熱量を上昇せよ。その数値

は  
』

リアンの口からこぼれるのは、複雑怪奇な『呪文』だった。

「ジグ、この子……」

「まあ見てろ」

『 数値の設定が完了。

続けて回転を促す力の象徴を【風】 および媒介とする色は【  
翠】 と銘じる。

精神を司る精霊と接続し、化合せよ。

複合条件による言語定義は 【時空】 と称する。

道具は、人に使えるべき物なり。望まれるならば、それに応える  
べき物なり  
』

リアンの口から、流れる水のように、言葉の奔流が押しよせる。  
ジークハルトの片眼鏡越し、様々なイメージを放つ色と光が見え  
ていた。

そして小さな指先から、【魔石】の中へと流れ込んでいく力を、  
黙って見送っていた。

『 以上、ここに定義を決定する。 > 属性付与・再起動 < 』  
エンチャント リアクト

呼応する。

翠色の【魔石】のなかに、溢れていた光が吸い込まれた。リアン  
は閉ざしていた瞳を開いて、ぱあっと花を咲かせてみせる。

「できまひたっ！」

「よし」

ジークハルトは、部品を乗せたトレイを寄せて、分解した懐中時  
計を元の状態に組み合わせていく。それもまた、見る者にとっては  
魔法のような手際の良さだ。指先で拾えないほどにバラバラになっ



たパーツが、決められた位置に収まって、元通りに形成する。

「完成だ」

そして最後に、元に戻った時計のゼンマイを巻く。時刻を合わせると、

カチ、コチ、カチ、コチ。

時計が規則正しく動きだす。さらには、懐中時計の全体から翠色の光が浮かびでた。

「質は保証するぜ。恐らく効果もあがってるはずだ」

「え、ええ……」

レティーナが、まだ驚いた様子で懐中時計を受けとった。時計を耳に添えて、その音色を確かめるような仕草をした後に、

「……懐かしい音が、聞こえる……」

隻眼の施されていない側の瞳を細めて、微笑んだ。

項目12：客人への詮索は、命運を選択するに等しい。

リアンの初仕事は大成功に終わった。レティーナが笑顔で「また来るわね」と言つて、満足そうに店を後にした直後、

「リアン、少し留守を頼む」

「へう？」

「表の看板は返しておく。客が来ても適当にあしらつとけ」

「えっ、えっ？」

困惑するリアンの様子には応えず、ジークハルトは急ぎ壁にかけていた上着を羽織り、そのまま駆けるように店を出ていった。

「……………」

その場に残され、所在なさげに、分解の途中だった目覚まし時計を手元によせる。

「続き、しよつかな」

ぽつんと呟いて、ネジ回しを掴んだときだ。廊下につながる扉が静かに開いた。

「失礼します。お茶を。あら？ リアン様、ご主人様は？」

「おでかけ。るすばん頼むつて」

「そうでしたか」

フィノがやってきて、両手に抱えた盆を作業机の上に置いた。湯気の立つ紅茶のカップを、リアンの前に差し出す。

「ありがと、フィー」

「ふふ。ご主人様の分も作ってきたのですが、冷めてしまいますし、こちらは私がいただいちゃいましょうかね」

フィノもまた椅子を引いて座る。甘いミルクの漂う紅茶を一口含んだときに、

「ねえ、フィー」

「なんでしょう」

カップに口付けたまま、上目づかいになって、リアンが何気ない

風に言う。

「レティーナって、どういう人かなあ」

「えっ？」

食器が小さな音を立てた。フィノが少し驚いて正面に座る少女を見つめると、柔らかそうな頬のうえに、ほんのり明るい朱が乗っていた。

「あ、あの、えっとね。ししょー、レティーナを、追いかけてったから……」

ももごと、言葉を口の中で転がすように言ってくる。

フィノが思わず、小さく笑った。

「リアン様、気になるんですか？」

「ちよ、ちよびつと……」

「いゃん可愛い」

地の声で反応してしまえば、リアンが言葉にならない小さな悲鳴をあげていた。ごまかすように紅茶を飲んで「あふっ」と舌を出す。そんな所作のひとつひとつが、フィノにとっては可愛らしく映ってしまう。

だからつい、口が軽くなってしまったのかもしれない。

「レティーナ様は、剣閃とも呼ばれる、一流の剣士にして冒険者です。ご主人様とは昔、同じギルドに属していたと聞いてますよ」

「ししょーも、昔は冒険者だったんだよね？」

「ええ」

フィノは紅茶を一口、静かに含んだ。隣に座るリアンが「続きは？」という表情をしていた。

「私とエリオット様がこの街に訪れたのは、三年前でした。その時には、ジークさんは冒険者を引退されており、すでにこの場所で鑑定士を営まれていました」

「へー、エリオットと、フィーは、ずっとこの街にいたんじゃないんだねー」

「はい。私たちは来訪者です。ジークさんと、レティーナ様はこの

街の出身ですよ」

カップが軽く音を立て、ソーサーの上に置かれる。リアンも聞きかえた。

「じゃあ、レティーナだけ、ずっと同じギルドで冒険者をやったの？」

「いえ、それはですね……」

フィノが困ったような素振りを見せた。少し開きかけた口を閉ざして、逡巡<sup>しゅんじゅん</sup>するように宣言する。

「あまり、気持ちのよい話ではありませんから」

「いいよ。フィー、教えて」

「リアン様？」

「わたし、ジークハルトのこと、知りたい」

翠の双眸に見据えられ、フィノがほんのわずか、たじろいだ。仮の主従関係であることすら忘れて圧倒される。王族、として生まれた者に共通する、静かな威圧感。

「おしえて、ね？」

「……私も詳細を存じているわけではありません」

「それでもいいよ」

「わかりました。くれぐれも、ジークさんにお尋ねしてはいけませんよ」

「あい」

二人の間に漂う空気が、再び和らぐ。そろってほんの少しの紅茶を口に含んだ。同時に小さな音が重なった。

「当時、お二人が在籍されていたギルドは、今は存在していません」「そうなの？」

「はい。ギルドの代表者を含めたパーティーが、迷宮を探索中に『全滅』してしまい、土地と財産を所有する権利が認められなくなっ  
たんです」

「……………え」

カチャン、と大きな音が鳴った。普段は甘くて優しい、野ブドウ

色の瞳が、まっすぐにリアンを貫いていた。「続けますか？」と尋ねられ、リアンは受け入れた。

「パーティには、当時、十三歳だったジークさんと、レティーナさんも参加されていたそうです。私も、それ以上に詳しいことは存じあげません」

職人街から、目抜き通りへ続く道を歩いていた。言葉は少なかったが、何気なく交わす視線や、整えられた石畳を歩く足音でさえ、互いがもつとも最適とする間合いを保っていた。

時が経てど、忘れられないものがあつた。

人の流れがうねっていても、最小限の動きでそれらを避け、すぐに元の立ち位置へと体が戻る。息をするように覚えていた。

懐かしいな、と。

雑踏の中を歩き、ジークハルトは思う。レティーナの左手もまた、常に長刀の柄に添えられているし、右手の指は、常に暖めておかんとするように泳いでいる。

彼女のベストの内には、過去に自分が贈った【魔】を込めた懐中時計が収まっているはずだった。自分も同様に、【魔】を込めた短刀と、片眼鏡を忍ばせている。

「ジグは、変わったわね」

「ん？」

前を見つめながら、レティーナが告げてきた。

「随分と優しくなったわ」

「どうだかな」

同じように応える。互いの顔は見ない。

「なったわよ。貴方は、自分の知識を誰かに教える人間じゃなかったもの」

ジークハルトの記憶よりも艶のある、それでいて、柔らかな微笑が返ってくる。

「もう、冒険者に戻るつもりは無いのね」

「無いな」

「残念。実は少しだけ、期待してたのに」

「ウソつけ」

間髪いれず応えると、また、楽しそうに笑われた。

「悪態にも、切れがなくなってるわよ」

言われてしまい、苦そうな顔をする。短い茶の短髪をかいて歩いた。眼帯のない左目と、懐かしそうに笑う横顔を見てしまえば軽口も叩けない。

二人は目抜き通りを越え、やや細い路地の方へ歩いていった。

街の雰囲気は一変し、なにかしら武装している者達が、暗い色の瞳を向けてくる。すれ違う度に、わずかな緊張感を覚えながら進むことになる。

「この街の、この場所だけは、いつになっても変わらないわね」

「……変えようとしている奴が、一人いるがな」

いつも厄介事を持ちこむ男の顔を思いだせば、隣に立つレティーナもまた、ふふつと笑っていた。

「数日まえだったかしら。おまえも森の探索に参加しないかって、わざわざ『蒼髪』が出向いてきたわ」

「ご苦労なこつたな」

「蒼髪が来たのは、いつだったかしら」

「三年前だな」

他の冒険者と同様、エリオットは数人の女性を連れて街にやってきた。

翌年には、卓越した戦闘能力から『蒼の剣聖』などと呼ばれるまでになり、さらには王城の政治に食い込んでいた。一体どんな詐術を使ったのかと、噂の種が途切れない男であったが、実際、普段はどこか飄々としている癖に、いざという時の立ち振る舞いや所作には、妙に高貴な振る舞いを見せていた。

「知ってるとは思うけど。蒼髪は、滅びた国の王族だ、なんて噂も

あるぐらいよ」

「実際聞いたら、想像にお任せするとか抜かしやがったがな」

「不思議な男よね」

「なに考えてるか、知れたもんじゃねえ」

あれだけ出世すれば、もうジークハルトの店に顔をだす必要もないだろうに、足しげく訪れては、厄介な仕事を持ちかけてくる。一度は冗談で「この国の王になるつもりかよ」と問いかければ、エリオットは「まさか」と両肩を竦めた後で言った。

『俺たちは根無し草だったからな。帰る家が欲しいだけなんだ。そして、この街には同じような境遇の連中が多いだろ？ だから、できる限り広くて、住み心地の良い家を作りたいと思うわけだ。その為にも、力が必要だ』

エリオットの根底にある想いは、正直、ジークハルトには理解しがたい。

仮に実現したところで重荷となるだろう。生きていくなら一人がいい。背負うものが少ないことが、この街では賢明な生き方だと身を持って知っている。

「ジグ」

「なんだ？」

「力、って、どういうものかしら」

レティーナが立ち止まっていた。わずかに行き過ぎたジークハルトは、彼女の方へと振りかえる。薄暗い路地裏で視線が交わった。

「蒼髪の問いよ。あいつは、大切な者を守るべき手段。と言ったわ」

人の流れはちょうど途絶えていた。

「不思議よね。あの男だって、それなりの地獄を見てきたのでしょうに。それでもバカみたいに、御伽噺の勇者みたいな事を語るんだもの……。ねえ？」

チキッ、と。

刀が鳴る。

「ジグ、あなたは、現実が分かっているでしょう?」

答えねば、斬る。とでも言うような気配を醸す。

豹変した昔馴染みの態度にも、ジークハルトは特に表情を変えなかった。そして目つきは相変わらず険しい。

「……そうだな」

思考することは、経験を、過去を蘇らせることに等しかった。

もっとも最初に浮かんだのは、小汚いスリの小僧だ。

「最初は、エサを食い、奪う手段だった」

「私たちと出会う前ね」

頷いた。即席のパーティに参加させられて罫付きの財宝を漁りまくっていた。けれど転機が訪れた。ややお人よしの人間に拾われてギルドと呼ばれる組織に所属した。毎日のように顔を合わせる大人たちは気が良かったし、優れた剣の腕を持つ、同じ年の少女もいた。気まぐれに、初めて贈り物をした。

「力があれば、金があれば、自分を満たして、たまには、相手を満たしてやることもできると知った」

「そうね、嬉しかったわ」

けれども平穏は続かなかった。ギルドが崩壊し、根こそぎ奪われていったとき、

「今度は、なにをするにも、金が必要であると知ったな」

「同感だわ」

器用にしか過ぎない手には、崩壊した日常を止めることはできなかった。

学が至らなかったのだ。日々、命を懸けて迷宮に潜るしかない。

それでも、どこかで情というものを信じており、金を持ち逃げした相手を許しかけた瞬間に、腹へと刃が突き刺さり、消えぬ傷を負ったのだ。

「……力は手段だ。持つことで、相手を殺して奪うことができる」

「ええ、私も殺したわ。殺しまくったわ。犯され、蹴られ、隙を見た夜にも、ね」



口元が自嘲するように歪み、剣先が抜かれていた。

その一閃は貫かず、かろうじて喉に添えられるに留まった。

「ね、ジグ」

剣先が薄皮一枚、触れて切る。

「過去、貴方の驕りが、私の人生を狂わせたことを覚えているわよね？」

喉から血が垂れる。あとほんの少し手を伸ばせば、それが致命傷になりかねない。しかし動かず、瞳を逸らさず応じた。

「街へ引き返そうと言う、お前の両親の言葉を俺が切ったな。迷宮の奥にあつた財宝に、仕掛けがあることに気づけなかった」

しん、とした気配だけが、魂を刻むようにおとずれる。

「たくさんの【魔物】に囲まれたわね」

「ああ」

「私は片目を失って、気がついたら貴方の背に負われてた」

「ああ」

「貴方は安っぽい言葉を吐いたわね。生涯をかけて償うとか、なんとか」

「言ったな。俺は何も知らない、単なるガキだったよ。酒場で妙なジジイに会ってから、そいつを知った」

ジークハルトは静かに、彼女に向かって言葉をかけた。

「結局のところ、力つてのは生きる手段だ。正しく生きようが、汚く生きようが、形は違えど、差は無えよ」

「素敵な答えね。今すぐに貴方を殺してやりたい」

「悪いが断る」

「あら、どうして？」

「生きてるんでな。残念なことによ」

極めて真面目な顔で言えば、レティーナは声をあげて笑った。

「それ、反則。貴方ってば、本当に優しくなりすぎよ」

「そうか」

「あー、もう。だったら、あの時の言葉は、今でもまだ有効なんで

しょうねえ？」

「有効だ」

「バカ」

剣先が翻り、鞘の中へ閉ざす。一滴の赤い血が伝う様子を見て、レティーナは柔らかに微笑んだ。

「貸しよ。今日だけは許してあげる」

「助かる」

「レティーナ様？」

物騒な会合を終えたとき、不意に、後ろから声がした。ジークハルトが振りかえると、そこには顔立ちの整った、十歳を半ばに超えた程だろっ少女がいた。

「ロゼ、どうしたの」

「いえ、あの、庭で作業をしていたら、声が聞こえたような気がして」

「迎えに来てくれたのね」

「はい」

素直に頷いた横目で、ジークハルトのことを見上げる。

「レティーナ様の、お知り合いの方ですか？」

「そうだな、そっちは……」

「私のギルドの子よ。貴方の弟子と一緒に、身寄りがないらしいから引き取ったのよ」

レティーナが言葉を挟んだ。その声は優しく、明るい。

「両親のギルドを買い戻したの。蒼髪のギルドにも少しだけ、借を作ったけどね」

「……そう、だったのか」

「他にも何人か身寄りのない子供たちを預かってるわ。いつかの誰かを思い出して、気がついたら声をかけちゃったのよ」

パチッと瞼を閉じて、ロゼと呼んだ少女の隣に立つ。頭の上にそっと手を乗せると、少し照れたように、くすぐったそうに笑った。

「お前は変わってねえな」

「本当にね」

力強く、告げた。

「蒼髪が言ってた森の探索に付き合ってもよかったんだけどね。長い間『家』を空けるのも不安な気がして、それに、久々に貴方の顔も見たくなったから」

笑みを向けられて、ジークハルトもまた笑い返していた。

秘めた想いを、隠し切れないというように。

「良かったら、寄ってく？」

「いや、今日はいい。ウチの店番はまだまだ半人前なんぞな」

「そうね。しっかり指導してあげなさい。また今度、店に寄らせてもらうから」

「ああ、そうしてくれ」

笑い声が二つぶん、静かに、どこか幸せそうに重なった。

「さよなら、ジグ」

「またな」

二人は別れた。

互いの家に帰るために。再び、それぞれの道を歩きだす。

### 項目13：店の主と、お客様。

職人街の奥にある鑑定士の店に、一通の訃報が届いた。

黒い上着を掴み、そういえば、あの日もこれを着ていたことを思い出していた。

「ジークさん、そろそろ時間です」

声に振りかえると、いつもと違う格好の女性が見えた。落ちついた野ブドウ色の髪だけが光を反射する。彼女もまた黒一色の喪服を着ており、唇の赤いルージュも相まって、妙に艶かしい。

「今日はメイドじゃないんだな」

「ええ」

「悪い。冗談だ」

ジークハルトが袖を通したとき、廊下に繋がる扉が開いた。ふらふらした足取りで、リアンがやってくる。

「……ししょ、フィ〜？」

「リアン様」

「どこか行くの〜？」

寝惚けているのか、ふわっと欠伸をする。ジークハルトが近づき、屈んで手を伸ばした。

「今日は閉店だ。上で寝てろ」

「ふえ？」

短い金の髪を乱暴になでる。リアンは頭を振りながらも、どこか嬉しそうに撫でられていた。

「いいか、怪しい奴が着ても扉を開けるなよ。二階でおとなしく、本でも読んでろ」

「あい〜」

背を向ける。それから外を見て「雨か」とつぶやいた。傘を手にして店をでる。反対の手には招待状と、壊れた懐中時計が握られていた。

その報告を聞いた時、正確な内容は、あつさり抜けていった。時間をかけて、どうにか、断片的に理解した。

自分のギルドの仲間を守るために、死んだこと。

生き残った仲間が、彼女の亡骸を運んだこと。

ギルドの主は、すべての最終決定と、責任を負うこと。

むかし、彼女の両親はそれを実行し、彼女もまた同じ道を選び抜いたこと。

牧師が十字を切った。

レティーナの名前を口にした、その音を、ぼんやり聞いていた。

小雨の降る早朝。街外れの墓地で、冷たい風が流れる。

冒険者の葬儀が行われることは珍しい部類に入る。大抵は朽ちた骨と化して、迷宮に転がることになるからだ。死体を持ち帰られることになつても、窯の中で焼かれ、細くなつた骨をそのまま河の中へ流されることも多い。

だから、たとえ少なくとも、名を彫られた墓前に人々が集い、一人の人間の死を嘆くことは大変に稀だった。

ここは、そういう街だった。

生も死も、  
氣品はあらず。

昨日、当たり前のように挨拶を交わした知人が、次の日には息絶えていた。姿を見なくなった。服だけが見つかった。そんな話を聞くのは珍しいことでは無い。

黒い集団から少し離れ、枯れた大樹の幹に背を預ける。手の内には、粉々に破壊された懐中時計が存在する。針は止まっていた。

『どういふ風の吹き回しかしらね？』

忘れた。 どうしてこんな物を渡したんだっ たか。

頭から、つま先まで。感覚が無い。

傘は閉ざしている。たぶん、ずぶ濡れになっている。

「ねえ、この前のお礼なんだけど。よかったら、」

棘のついた棒で殴られるような感触がきた。胸が痛んだ。

朝からなにも食べていないのに、吐き気を催した。喉がカラカラに枯れている。

いっそ、上着に隠した短剣で、喉を切り裂いてしまおうか。

『どうして、私を守ってくれなかったの。ウソツキ』

思い出す。なのに、時計はもう動かない。

針を巻き戻すことは叶わない。

『ジグ、貴方は根本的なところで、冒険者には向いてないんだと思う』

彼女を守ってやりたかった。少しでも危険から遠ざけてやりたかったのに。

ふざけるな。

『あなたは賢くて、慎重で、実は臆病だったりする。つまり、優しいすぎるのよね』

ふざけるな、ふざけるな。

『平穩に生きるべきだわ。たとえば、そうね。店でも開いてみたら？』

ふざけるな、ふざけるな、ふざけるなッ！

『また今度、あなたの店に寄らせてもらうから』

「……なにもッ！」

できなかつた。

壊れ、止まってしまった時計は、二度と動きはしなかつた。

眠れば昔の夢にひき戻されて、起きれば明日がやってきた。

「……………あ？」

頭が揺れた。世界は闇の中だった。少しずつ目が覚めて、ああ、真夜中なのかと、ひとりで馬鹿みたいに呟いた。

「……喉が渴いたな」

酒の匂いがした。気分が悪くなるほどではないが、それでもいつもより多く飲んだせいかな、額が軽く痛んだ。胸焼けがひどい。

「……………水」

ギツ、と音を立て、ベッドから起きあがる。食卓に供えてある清水を求めて、一階へ降りていく。途中、店の表に繋がる扉の先から、灯りがこぼれているのを見つけた。

カチャカチャと、小さな音が聞こえてくる。

進むか、無視するか、戻るか。

考えても無駄に頭が痛くなるだけという風に、不機嫌な顔のまま、部屋に入る。

「リアン」

「あつ」

短い金髪が、さらつと揺れた。白い手に精密のネジ回しを持っている。夜なので、薄いシャツと、淡い色のショートパンツを履いているだけの格好だ。

「なにしてんだ、おまえ」

「ご、ごめんなひやい！」

リアンが手元に散らばった部品を隠そうとする。無視して近づくと、作業机の上には、完膚なきまでに、粉々に砕けた懐中時計があった。残された想いの品はパーツ単位で歪みが生じ、折れ曲がっている。

「直せうかなと、思つて……………」

「無理だ」

向かいの客用の椅子を引いて座った。それぞれ椅子の高さの違いから、二人の頭の位置は同じところになる。しゅん、と萎れた顔を眺めて、くくつと笑う。

「直せるわけないだろ」

「……………あい」

「コイツはもう無理だ。ひとつの時計を、最初から作るのと変わんねえよ」

乾いた笑みが広がった。ひたすらに、どこまでも、波のように広がった。

「……俺が守るとか、どのツラ下げて言いやがったんだか……」  
力を抜いて天井を見あげる。視界が揺れた。

「リアン、フィノはどうした？」

「ふえ？ ギルドに帰ったよ。おぼえてない？」

「そうか……。エリオットが帰ってきたんだっただな」

早朝の葬儀の最中、古い知人が亡くなった代わりに、森の探索に出かけていたエリオットが生還した。当初の契約通り、フィノと王女を自らのギルドへ連れて帰ろうとしたが、

「おまえ、どうして、フィノと一緒に帰らなかったんだ？」

「もう少し、ここに、いたかった、から……」

「こんなところに居てどうすんだ」

「……もっと、色々教えて欲しい、でう……」

翡翠の瞳に、涙が溜まって、こぼれ落ちていった。

小さな手の甲でぐしぐしと涙をぬぐう。

「なんで、おまえが泣くんだよ」

「……わ、かんない、でう……っ」

ぐすつ、ぐすつと、こぼれる嗚咽を、ただ黙って聞いていた。

椅子に座ったまま、その頭に、思わず手を乗せてやろうとして気がついた。

また、重荷を増やすのか？ 一人が生きやすいんだろう？

伸ばした手が止まる。

盗賊の力は、誰かを守れるほど、強くない。

「帰れ、リアン」

「なんでっ！」

「迷惑なんだ。おまえはもう、精霊の泉の権限を持つ、唯一の生き証人だ。つまり本音を言えば、死んで欲しいって連中がわんさかいんだよ。いつかこの店にも、おまえの命を狙うヤツが来るかもしれない」



すうつと、リアンの瞳から光が消えていく。

ただ放心したように、ジークハルトを見つめる。

「めいわく……？ わたし」

命を狙われることよりも、そっちの方がこらえるというふうに、言う。

「わたし、ここにいたら……、ジークに、めいわくかけう……？」

返す言葉に詰まった。心が弱っていたせいかもしれない。酒も少し残っていたこともあるのか。ともかくその時、自分を慕ってくる存在を斬り捨てることができずにいた。

「……俺は、一人が気楽なんだよ」

代わりに、とことん情けない言葉が口をついた。

そんな安っぽい言葉で、愛らしい、一途な子供が納得するはずもなかった。

「じゃ、じゃま、しないからっ！」

むしる勢いづいた。

「ご、ごはん、つくりまう！ お洗濯とか、フィーの代わりにするからっ！ こーひーもいれまうっ！ だからっ、だからっ……！」

拾ってください、拾ってくださいいっ！

どこぞの捨て犬だか、捨て猫だかが、必死にきゃんきゃん吠えてくる。

「……あのな、少しぐらい王女のプライドとか無いのか」

「そんなものっ、お金になりまへんっ！！」

しかも変なところだけ飼い主に似てきた。ジークハルトが「はあ」と最大級のため息をこぼして、作業机の上に散らばる懐中時計の残骸を見やった。

「卒業試験にするか」

「へう？」

「ボロクズになったコイツを一から組み立て直せ」

「えっ、えっ、えっ？」

「おまえは俺の弟子なんだろ、リアン」

「　　っ！」

今度こそ目の頭に手を添えた。添えてしまった。これで後戻りができないな、という想いはあったが、それでも自然と笑っていた。薄汚い生まれの盗賊だって、光を求めてはいけない、なんて理由もない。

「し、ししょー……」

「なんだ」

「……笑ってまう」

「うつせえ」

「にやつ！」

身を乗りだし、細い髪の毛を掴んでぐしゃぐしゃ回す。リアンが声をあげて笑う。ジークハルトもまた笑った。その後で、翠の両眼に溜まった涙を、指の腹で拭ってやる。

「リアン」

「……あ、いつ！」

「時計の部品を扱ってる職人の工房と、『魔石』を専門に売買してる知り合いを紹介してやる。俺がここまで金にならない仕事をするなんざ滅多に無いぜ。だからやれ、いいな？」

「うんっ！」

柔らかそうな頬の上を、もうひとつ涙が零れていく。笑顔が満開になった。

「わああ……いつ!!」

「うおわっ!？」

両手を伸ばす。机を乗り越えて、飛び込むように抱きついた。ジークハルトは椅子に深く座っていたせいで逃げられず、咄嗟に全身で抱きとめる。椅子の足が浮き上がり、二人一緒に後ろへ倒れ込んだ。

「だいすきっ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0340z/>

---

アイテム鑑定士の業務内容

2011年12月1日16時57分発行